98-25
250

決鬪

（チエエホフ作）

Чехова

小山内薰譯

明治
43. 6. 10
内務

小引

一、この飜譯は露西亞の原書からしたものではない。逸名氏の英吉利譯に、アンリ・シロル氏の佛蘭西譯を對照して、自家の取捨を加へた重譯である。

一、英吉利譯よりは詳しい、佛蘭西譯よりは粗である。英吉利譯に無くて、佛蘭西譯に有る部分も、悉くは取入れなかつた。許すべからざる脱漏のみ補ふ事にして、英吉利譯の省略に意味のある部分は、總てその儘にして置いた。

一、章の切り方も英吉利譯は十八、佛蘭西譯は廿一である。私は自分の考で、二十に分けた。節の切り方、點線の使ひ方は、殆んど總て、佛蘭西譯に從つた。

一、地名は總て露と英吉利讀みにした。人名は出來得る限り露西亞讀みにした。

一、英吉利譯に誤譯らしい箇所もあつた。佛蘭西譯に誤譯らしい箇所もあつた。然ういふ場合には、自分の常識と理性とに訴へて、正しいと思へる方に從つた。私の譯にも隨分誤があらう。原來、誤譯などいふものは一々原書と對照しないても、大抵飜譯その者だけを讀んで見れば、分るものだ。讀過の際、變だと思つた所があつたら、遠慮なく指摘して貰ひたい。

一、この飜譯は、露西亞の原作に比べたら、元より不完全極まる物であらう。併し、英吉利譯なり佛蘭

決

鬪

Anton Tchekhov

Антонъ Чеховъ

アントン・チエエホフ

西譯なりからした日本譯として、少しても意味のある物を得たいと私は始終望んで來た。私にこの小な仕事を終へるのに足掛四年の日子を費した。

明治四十三年二月十八日夜箱根塔の澤にて最後の訂正を了へたる時

譯者

（一）

朝の八時は、土地の官吏や避暑の旅客が、蒸暑くて寢苦しい夏の夜の汗を洗ひに、いつも海水に來る時刻である。

イワン・アンドレヰッチ・ラアエウスキイといふ、廿八になる、痩せた、小意氣な青年が、上靴を穿いて、大藏省の制帽を冠つて、海水に來た時には、もう懇意な連中が大分海岸に集つてゐた。その中に、日頃親しくする軍醫のサモイレンコオもゐた。

短く刈り込んだ大頭、猪首、赤ら顔、長い鼻、毛深い眉、灰色をした頬髭、恐ろしい肥り方、三軍を叱咤する將軍のやうな聲、これらを以て一寸見ると、サモイレンコオは、口喧しい、下劣な、成上り者のやうに見える。ところが二度三度と附合つて見ると、案外この顔が愉快になつて來る、美しくさへ見えて來る。

實際、彼は優しい親切な男である。彼は町の人の誰とも仲が好い。金を貸して遣る、診察をして遣る、婚禮の媒人になつて遣る、喧嘩の仲裁をして遣る。野遊會を開いては、羊の肉を揚げる、旨い魚のスウプを調へる。始終何か忙しい、始終人の爲に何か善事をして遣つてる、さうして始終幸福だ。概觀すれば、彼は完全な人間である。たゞ彼に二つ缺點がある——一つは、どういふ譯か、親切な風を見せるのを嫌つて、わざと傲慢冷酷な態度をする事、一つは、

といふ稱號を、常に部下の看護卒並に兵から要求するといふ。

『サモイレンコオ君、こゝに斯ういふ問題があるんだが、君か。』二人水へ飛込むと、ラアエウスキイは先づ口を切つた。

に惚れるとするね、その女と好い仲になるとする、二年ぐ、見て、さてその女が厭になつたとする、斯ういふ場合に君。

『それは譯のない問題だ。「何處へでも出て行け。」――これで

『そりや口で然ういふのは容易しい。が併し、女の行き所がある。女に親類も無く、金も無く、働く力も無いとしたら如何する……』

『よし、然うしたら、女に五百ルウブル遣るか、毎月廿五ルウブル宛遣る事にして追拂ふさ。譯のない事だ。』

『然うだ、五百ルウブル金があればね、或は又毎月廿五ルウブル宛拂へればね。併し、若し女が利口で、自尊心に富んでゐるとしたら如何する。それでも君は婦人に金錢を突きつけるやうな事を敢てするかね。若し爲るなら、如何なる方法を以てするね。』

サモイレンコオが何か答へようとした時、高い浪が寄せて來て、二人の頭の上へ被さつたかと思ふと、岸に碎けて、水音凄まじく、岩を越えて引いて行く。二人は水を出て着物を着始めた。

『厭になつた女と一緒にゐるのは實際辛いものさ。』と、サモイレンコオは長靴の中の砂を振ひ出しながら、『併し、君、それも人道の見地から考へて見んければならんよ。若し僕に然ういふ事が起つたら、僕は厭になつたといふ風を素振にも見せないね、そして死ぬまで女と添ひ遂げるね。』と言つたが、急に自分の言つた事が氣恥しくなつて、『僕にして見ると、世界に女なんか一人も無い方が好い、女なんか滅びて了へだ。』と言ひ直す。

着物を着てから、二人はカフエエを訪れた。サモイレンコオはカフエエを案のやうにしてゐるので、食器なども自用のが特別に備へてある。毎朝彼の前に

出るものは、盆に乗つた一杯の珈琲と、丈の高いコップで氷水が一杯と、小な盃でコニャックが一杯とである。彼は先づコニャックを飲む、それから熱い珈琲を飲む、それから氷水を飲む、やがて例のやうに眼が朦朧になると、頬髭を撫でながら、海を凝と見て、『どうも素敵な景色だ。』と言ふ。

長い一夜を煩悶で展轉反側したラアエウスキイは、草臥れて眠くなつて來た。海水も、珈琲も、少しも彼の氣を緊張しなかつたのである。

『先刻話した問題に歸るがね、アレクサンデル君。』ラアエウスキイは暫く默つてゐた後で、又斯う言ひ出す。『僕は何も君に隱さない、君には親友として總ての事を忌憚なく暴露する。僕とナデエダとの關係は愚劣だ……甚しく愚劣だ。願はくば僕の私事を以て君を惱ます事を許し給へ、僕はこの重荷を負うてゐるに堪へんのだから。』

ラアエウスキイの告白の何たるかを豫知して、サモイレンコオは眼を落すと、指で食卓を叩き始めた。

『僕は二年間あれと一緒に暮らしたんだ、そして、今ではもう少しもあれを愛してをらんのだ。』と、ラアエウスキイは語を次いで、『あれと僕との間には初から愛が無かつたんだ、それは近頃になつて分つて來た……二年の間欺されてゐたんだ。』

ラアエウスキイは薔薇色をした自分の掌を見詰める、爪を嚙む、それからカフスを弄る、これはいつても彼が話をする時の癖である。

『この際君が僕を助ける事の出來ないのは、僕よく知つてゐる。併しね、君、僕のやうに失敗ばかりしてゐる無用な人間はね、言語の内に唯一の慰藉を見出すものなんだ。僕は僕の犯した行爲を概括しなけりや氣が濟まんのだ。僕の愚

劣な生涯を論文或は純文學で説明するか辯解するかしなけりや氣が濟まんのだ。例へば、吾人貴族は墮落しつゝあり而して云々といつたやうな工合にね。昨夜も「トルストイは本當だ、どうしても本當だ。」といふやうな事を夜中考へて、それで自分で自分を慰めたよ。これが慰安になるんだ。實際トルストイは大文豪だね。』

毎日讀まう讀まうと思ひながら、まだ一度もトルストイを讀んだ事のないサモイレンコオは、當惑して、『然う、他の作家は想像て書くが、彼は自然をそのまゝに寫すね……』

『ああ。』とラアエウスキイは吐息をついて、『吾人は文明に依つて、吾人自らを害ふ事幾何ぞやだ。僕は或人間の妻君に惚れたんだ。女も僕に惚れたんだ……初の内は接吻だ、蜜のやうな晩だ、起請だ、スペンサアだ、理想だ、「社會的權利」だ……なァんのと言ふが、みんな嘘僞さ。現實に於いては、二人て女の亭主を捨てゝ逃げたんだ。人の亭主を捨てゝ逃げながら、我と我を欺いて、吾人は人生の空莫から逃げたのだと思ふ。併しながら、人生の空莫は却つてこれから始まつた、それもこれも皆自業自得さ。コオカサスの土地と人間とに慣れるまで、僕は官服を着て職を執らなければならなかつた。やがて、幾らかの土地を買ふ、額に汗して働く、葡萄を植ゑる、地面を耕す、それからまだ色んな事をする筈だつた。君にして若し僕の地位にをるなら、或は君の親友、動物學者フォン・コオレン君にして若し僕の地位にをるなら、恐らくナデエダと三十年は同棲するだらう、さうして立派な葡萄園と一千エエカアの印度米の田地を子孫に遺すだらう、然るに僕は、此所へ着いた第一日に既に失敗して了つた。町は堪らず暑い、退屈だ、寂しい。野原へ出れば、何處の叢にも、どの石の下に

も、蛇や蝎がうじや〳〵ゐる。野原の向うは山か荒地で……もうその先には何も無い。可笑しな土地の人だ、可笑しな自然だ、愚劣な生活だ。毛皮の外套を着て、ナデエダと腕を組んで、暖い國を夢見ながら、ネウスキイを散歩するやうな事は、此所ではとても出來ない。この土地では總ての人が奮闘に奮闘しなければならないのだ、然るに僕は戰爭には極めて弱い……情ない程の怠け者だ。僕は、僕が從來勞働生活並に葡萄園に就いて抱いて來た理想は總て一文の價値も無いものであつたといふ事に直ぐ氣がついた。戀に關しては、スペンサアを讀んで、男の爲に世界の果まで來るやうな女と同棲する事は、そんじよ其邊のアンフイイサやアクリイナと同棲するより、もつと無趣味なものだといふ事を主張しなければならない。火熨斗の匂も同じだ、白粉や化粧水を塗りくつた顏の匂も同じだ、毎朝の捲髮紙も同じだ、そして自ら欺くのも同じだ。』

『けれども一家に火熨斗が無かつたら困るだらう。』と、ラアエウスキイの餘り率直なのに顏を染めながら、サモイレンコオが言ふ。『君は一體今日如何かしてゐるのだ。ナデエダ・フエドロウナさんは、立派な、教育のある婦人だ。君は又多くの男子の内で最も傑出した才人だ。これをしも好配偶と言はずして何が好配偶であらう。成程、君は正式に結婚はしなかつた。』と言つて、四邊を見廻して聲を潜め、『けれどもそりや君の罪ぢやない……それに又、吾人は舊習慣を斥けなければならん、吾人は近世思想と同じ水平線の上に立たなければならん……僕は僕自身として自由結婚を是認する……然り、是認する……併し、一旦婦人と一緒に生活を始めた以上は、最後までその婦人と生活を續けなければならん。』

『愛が無くてもか。』

『まア僕の言ふ事を聽き給へ。』と、サモイレンコオは遮つて、『八年ばかり前に、この土地に一人の事務官がゐた、老人でね……非常な才子だつた。この人の常に言ふには、「夫婦の間に最も肝要なものは忍耐である」とさ。どうだね、ワンヤ。愛ではない、忍耐だといふんだぜ……愛は決して永く續くものぢやない。君は二年間愛で生活して來たんだ、ところが今君の家庭は、君の總ての忍耐力を喚起して、それに萬事を處理させて行かなければならん時代になつて來たんだ……』

『君はその老事務官を信ずるさ。』と、ラアエウスキイは口を返じて、『併し僕はその語を以て全くノンセンスだとするね。その老人は僞善を演ずる方法を知つてゐるんだらう、忍耐を實行する方法も知つてゐたんだらう、併し僕はまだそれ程墮落はしてをちんからね。僕にして若し忍耐の德が得たいと思へば、鐵亞鈴か荒馬を買ふね、なにも婦人に關係する必要はない。』

サモイレンコオは氷を入れた白葡萄酒を命じた。二人がこれを飲み終ると、ラアエウスキイは突如として——

『腦軟化症といふのはどんな病氣だね。』

『それは……どう言つたら好いだらうなア……腦髓の組織が惡くなる病氣さ。』

『直る病氣か。』

『そりや直るさ、手當さへ好ければ。』

『分つたらう、君……もう迚もあれとは一緒にゐられない事情になつてるんだ、もう迚も僕の力には及ばんのだ。斯うやつて此所に君と一緒にゐる間こそ、哲理を論じて笑つてもゐられるが、家へ歸るが最後、壓つけられるやうなんだ、そりやア不見目なもんなんだ。もう一月あれと一緒にゐなければならんといふ事を考へる位なら、寧ろ腦味噌を引摺り出して了つた方が好いと思ふ位厭なん

だ。しかも僕はあれを捨てる事が出來ないんだ……あれは唯一人だ、爲事の出來ない人間だ、それに二人とも些とも金が無いんだ。あれは何處へ行く事が出來るだらう。僕はもう何も考へる事が出來ん……ああ如何したら好いんだらう。』

サモイレンコオは途方に暮れた。その當惑を隠す爲に、『一體婦人は君を愛してるのかい。』と訊いて見る。

『そりゃ愛してゐる。僕と別れるのは、白粉や捲髪紙と別れる程辛いには違ひない。僕はあれの化粧室に必要缺くべからざる品物なんだ。』

サモイレンコオは益々まごつく。『今日は君如何かしてるんだ、ワンヤ。君は睡眠不足なんだ。』

『成程僕は睡眠不足だ……身體中工合が悪い……頭は空虛だ、心臓は壓つけられるやうで少しも力が無い……僕は如何しても逃げなければならん。』

『何處へ。』

『北方へさ。松の林へさ、人間世界へさ、思想へさ……僕はモスコオかツウラのやうな所に住めるなら、生命の半を擲つても惜しくないね。小川で泳ぐ、涼しくなる、ね、それから馬鹿な學生でも何でも好いから、それを捕へて散歩の相手にしながら、喋る、大に喋る……ああ枯草の匂。覺えてるか、君。夕方庭を歩いてると、ピアノの音が家の中から洩れて來る、汽車がゴロ〜いつて……る……』

ラアエウスキイは嬉しくなつて、覺えず笑ひ出す。涙が眼へ溜つて來る、それを見せまいと、隣寸を取る風をして、隣の食卓へ身を延す。

『僕は十八年露西亞にゐなかつた。』とサモイレンコオは言ふ。『僕は露西亞といふ所はどんな處だつたか、もう殆ど忘れて了つた。僕はコオカサ

無いと思つてる。』

『エレスチャアギンの繪に、死刑の宣告を受けた人間が、非常に泣いてる所があつた。君の所謂美しきコオカサスは恰どその井戸のやうな氣がする。ピイタアスバアグで烟突掃除になるか、この土地で皇族になるかと言はれたら、僕は寧ろ烟突掃除になるね。サアカシアの女か、何といふ愚劣な動物共だ。』

『まア、まア、君。』

ラアエウスキイはすつかり考へ込んで了つた。サモイレンコオはラアエウスキイのくるくると曲つた身體から、一つ所を凝と見つめた眼附から、血の氣の薄い汗ばんだ顏から、落込んだ兩の頰顎から、嚙潰した爪の先から、ひどく踵の減つた上靴を穿いてるので、下手な繕ひやうのしてある靴下が洋窄の下から見える所まで見廻して、憐憫の情に堪へられなかつた。サモイレンコオは頼りの無い孤兒を見るやうな氣がして、覺えず、『君の阿母さんは生きてるのかい。』と訊く。

『ああ、生きとる。併し、僕等は自分勝手を働いたんだ。もう決して親子の關係は許して呉れまいよ。』

サモイレンコオはその友を愛してをる。ラアエウスキイは好人物だ、學者だ、親切な男だ、共に笑ひ共に語るに足る人間だと、思つてをる。

併しながらラアエウスキイは、量に於ても度數に於いても、酒を飲み過ぎる。骨牌を弄ぶ、自分の職を嫌ふ、收入以上の生活をする、話の中に不體裁な語を交へる、上靴で町を歩く、知らない人の前でナデエダと喧嘩をする。斯ういふ事は總てサモイレンコオ大嫌ひである。しかもラアエウスキイは言語學の學者

で、二種の眞面目な雜誌も取つてをる、時々少數の人にしか分らぬ非常に高尚な話もする、そして敎育のある婦人と一緒に暮らしてをる。サモイレンコオには これが分らなかつた、分らぬながらも好きだつた。彼はラアエウスキイを自分の先輩だと思つて、尊敬してゐるのである。

『それに、』とラアエウスキイは首を振つて、『だがこれは僕と君だけの話だよ：：ナデエダにさへまだ內證にしてゐるんだから……實は一昨日、あれの亭主が腦軟化症で死んだといふ手紙を受取つたんだ。』

『それは氣の毒な。』とサモイレンコオは吐息をついて、『それを何故又君は內證にしとくのだ。』

『手紙を見せると、會堂で結婚式を擧げなければならん事になる。そんな事の起る前に今までの關係を一掃して了はなければならんのだ。もう迚も一緒には

をられんといふ事をあれに自覺させてから、手紙を見せようと思つてるんだ。然うすると危險が無いからね。』

『ワルヤ、君は君の爲すべき事を知つてる筈だ。』と言ひかけて、サモイレンコオは何か賴みたいのだが、賴んで拒ねられたら大變だといふ風で、俄に歎願をするやうな悲しい顏色をして、『結婚をし給へ、ねえ君。』

『何の爲に。』

『あの立派な婦人に對する君の責任を果す爲にさ。あの人の亭主は死んだんだ、攝理が君に君の爲なければならん事を敎へてゐるんぢやないか。』

『可笑しな男だ、それは出來得べからざる事だといふのが君には分らんのか。愛なくして結婚するのは、信仰なくして禮拜に連るのと同じく醜劣な事だ。』

『けれども結婚はしなけりやならん。』

『何故結婚しなけりやならんのか。』と、ラアエウスキイは激して詰め寄る。
『でも君が亭主の手から盗んで逃げた女だらう。』
『けれども僕は先刻から率直な露西亞語で言つとる。僕はあれを愛してをらんのだ。』
『よし、愛さないなら尊敬し給へ、尊敬して婦人を幸福にしてやり給へ……』
『尊敬しろ、幸福にしてやれ……』と、ラアエウスキイは鸚鵡返しをして、『尼法主のやうにか……尊敬のみて婦人と同棲が出來ると思つてるなら、君は悶むべき科學者だ。』
『まア、ワンヤ、ワンヤ……』と、サモイレンコオは又まごつく。
『君は年をとつた子供だ、理論家だ。僕は若い年寄だ。實際家だ、迚も合ひはしないよ。もうこの話は廢めにしよう……おい、ムスタアフア。』と、ラアエウ

スキイは給仕を呼んで、『勘定だ。』
『いんや、好いよ……』と、ドクトルはラアエウスキイの腕を捕へて、『これは僕が拂ふ。僕が命令したんだから。おい、俺の帳面へ附けて置けよ。』と、ムスタアフアに言ひつける。
二人は立上つて、默つて海岸へ出た。廣小路へ曲る角で立止つて、互に手を振つて、別を告げた。
『君は腐つたね、ええ君。』とサモイレンコオは吐息をついて、『運命は君に贈るに、若い、美しい、教育のある婦人を以てした。然るに君はそれを捨てようといふのだ。僕は神の賜物なら、氣立が好くて親切でさへあれば、よた〳〵歩きの婆さんでも滿足するね、僕はその婆さんと葡萄園に同棲するね、そして……』
と言ひかけたが、急に語を正して、『そして婆アにサモワルを沸して貰ふ。』

ラアエウスキイと別れてから、サモイレンコオは廣小路を歩いた。威しい顔をして、殿な態度で、ウラヂミイル勳章に胸を飾つて歩く時、彼は甚く愉快なのである。そして世間の人も自分を見ると必と愉快だらうと思ふのである。

『ラアエウスキイがコオカサスを嫌ふのは可笑しい。』とサモイレンコオは考へる。『非常に可笑しい。』

一隊の兵士が通る、彼に敬禮をする。廣小路の右側の人道を、或官吏の妻君が男の子を連れて遣つて來る。

『お早う、マリア・コンスタンチノウナさん。』と、サモイレンコオは嬉しさうにニコ〳〵笑ひながら聲をかける。『海水に御出でしたか。ハ、ハ、ハ……どうかニコヂン君へ宜しく。』

彼は又獨で嬉しさうにニコ〳〵笑ひながら歩き出す。と、看護卒のビリンが

遣つて來る、これを見ると俄に眉根に皺を寄せて呼び止め——

『誰か病院へ來たか。』

『誰方も。閣下。』

『え。』

『誰方も。閣下。』

『宜しい。行け……』

彼は威風堂々と、レモネエドの立賣の方へ歩いて行く。そこにはジョオジア人にも擬ふ骨格の逞しい猶太人の婆さんが賣賣の後に座つてゐる。彼はこの婆さんに三軍を叱咤するやうな聲で——

『曹達水を一杯。』と命令する。

(二)

ラアエウスキイがナデエダ・フエドロウナを嫌ふ主な原因は、女の言ふ事爲す事が悉く啞に見えるからである。彼が今まで婦人及戀愛に就いて讀んで來た事は、ナデエダ・フエドロウナ及その夫と自分との關係に依つて、總て確められたやうな氣がした。

家へ歸ると、女は既に盛裝して、難しい顏をして、窓の側に座つて、珈琲を飲みながら雜誌の頁を繰つてゐた。何故珈琲を飲みながら、あんな難しい顏をするのであらう。何故別に見せて喜ばせる人も無いのに、長い間かゝつて髮を結ふんだらう。髮を結つて盛裝するのは綺麗に見せたいからだ、本を讀むのは利口に見せたいからだ、とラアエウスキイは思ふ。

『今日海水をしたら惡いでせうか。』と女が訊ねる。

『行かうと行くまいと御前の勝手さ。それが爲に地震が始まる譯でもあるまい……』

『いんえ、御醫者に叱られるといけないから、訊いて見たんです。』

『そんなら醫者の處へ行つて訊くが好いぢやないか。俺は醫者ぢやない。』

ナデエダ・フエドロウナの露出しに出てゐる白い頸と、頸筋に纏れてゐる髮の毛を見て、ラアエウスキイは堪らず厭な氣持になつた。彼はアンナ・カレナが自分の亭主の厭になつた時に、その耳まで厭になつたといふ事を思ひ出して、《本當だ。實に本當だ。》と思やもつたり

氣が滅入つて、その癖そは〳〵して、彼は書齋に這入つたが、やがて長椅子の上に横になつた。一連の思想が、薄暗い秋の夕暮を繋つて通る荷車のやうに、

頭の中を通り過ぎる。彼は、鈍い、壓つけられるやうな氣持になつた。

ナデエダに對し、ナデエダの夫に對して自分の爲た事は確に惡い、ナデエダの夫の死んだのも全く自分の過からだとラアエウスキイは思つた。ラアエウスキイに死刑の宣告を下したのは彼自身のライフである。彼は自分のライフを無殘に費つて了つたのである。彼は偉大なる思想の世界、智識の世界、勞働の世界を捨てたのである——嘗ては自分の力量内にあつた筈の、その驚嘆すべき世界を捨てたのである。確に然ういふ世界は此處には無い。腹の減つた土耳古人や懶者のアビシニア人の中には無い。音樂、演劇、新聞、その他あらゆる精神的活動の盛な北方でなければ無い——その北方に於いてのみ、彼は正直にも利口にも高尚にも純潔にもなり得るのだ。彼は自分が或理想を抱いてをらぬといふ事、人生に對して堅固した主義を持つてをらぬといふ事を恥ぢてをつた、そ

の癖人生が何を意味するのか好く分つてゐなかつたのである。二年前にナデエダ・フエドロウナと好い仲になつた時は、女と一緒にコオカサスへ行きさへすれば、空虛な陋劣な人生を逃れる事が出來るのだと思つてゐた。然るに今は又、女を捨てゝビイタアスバアグへ行きさへすれば自分の欲する總てのものが得られると確信してゐるのである。

『逃げろ。』起直つて、爪を嚙みながら、彼は斯う呟いた。『逃げろ。』

彼は、自分が朝飯後、汽船の甲板に出て、婦人連と喃々する有樣を想像して見た。それから、セワストポルで汽車に乘換へる、汽車は北方へ向ふ……北方へ。自由、萬歳。ステエションが一つ又一つと、見えては隱れ、隱れては見えて來る、空氣が段々冷くなる、段々鋭くなる、赤楊の樹が見えて來る、松の樹が見えて來る、クウルスクへ着く、モスコオへ着く……食堂で酸つぱいキャベツ

ジスウプ、粥の附いた羊、鱈魚、麥酒……一言にしていへば露西亞だ、眞の露西亞だ、決して亞細亞ぢやない。汽車中の旅客がするのは商賣の話である。近頃評判の歌唄の話である、佛露同盟の話である。何處を見てもカルチユアのある智識のある人生だ……早く、早く……終にネウスキイ、大サンドワアヤ、此處に彼は學生生活をしてゐたのである。此處に又、懷しい灰色の空、霏々と降る雨、しよぼ濡れた馭者……

『イワン・アンドレキッチ君。』隣の部屋から誰かゞ呼ぶ。『お内。』

『ゐるよ。』と、ラアエウスキイは答へる。『何だ。』

『調印書類。』

ラアエウスキイは徐に立上つた。頭がぐら〳〵する。欠伸をしながら、上靴をバタリ〳〵と隣の部屋へ這入る。と、開いた窓の側に立つて、往來から覗いてゐるのは、年若な同僚の一人で、見れば公の書類を窓の敷居に廣げてゐる。

『今直ぐ。』と、ラアエウスキイは優しく答へて、インキ壺を取りに行く。やがて又窓へ戻つて來ると、書類は讀まずに、直ぐ花押をして遣り、『暑いね。』

『暑いです。今日は御出勤になりますか。』

『むづかしいね……少し身體の工合が惡いから。飯を食つたら家の方へ行くッて、シエシコウスキイ君に言傳をして呉れ給へ。』

官吏は歸つた。

ラアエウスキイは長椅子へ戻つて、再び空想に耽る。

『然うだ、俺は色んな事を考へなけりやならん、先づ此處を去る前に借金の始末を附けなければならない。殆ど二千ルウブルから借がある。ところで今金は一文も無い……だが、それは勿論、重大な問題ぢやない。どうかして今その一

部だけ拂へば、あとはピイタアスバアグから送つても好い譯だ……一番重大な問題はナデエダ・フエドロウナだ……何より先づ第一に爲すべき事はあれとの關係を絶つ事だ……然うだ。』

偶と、サモイレンコオによく相談してからといふやうな考が浮ぶ。

『併しその必要が何處にある。唯繰返し俺の婦人論を聽かせるだけの事ぢやないか。もう婦人論を聽かせる必要はない。先づ第一に俺は自分の命を救はなければならない。この呪はれた束縛の内にあつて、俺は息が塞るばかりだ。俺は自殺をしてゐるのだ……こんな生活を續けるのは愚劣だ、苦痛だ。他の在らゆる物に比較して、確に小い、確に無意義だ。逃げろ。』と、彼は起直りながら呟いた。

『逃げろ。』

寂しい海岸や、暑熱や、烟こめた淡紫の、常に默々たる連山の單調は、彼

の氣を滅入らした、彼の精力を奪つた。彼は自分が天才でなく、純潔でなく、正直でない事を、どうして自ら知らう。彼はこの恐ろしい土地を逃げる事が出來さへすれば、政治家にも、雄辯家にも、公法學者にも、偉人にもなれぬとは限らぬ。それを誰が否定出來よう。大人物が束縛を逃れたい爲に監獄の塀を破つたり、獄丁を欺いたりするのに、正不正の問題を持出すのは愚ではあるまいか。斯やうな境遇の下にある斯やうな人物にとつては、事皆總て正である。

二時にラアエウスキイとナデエダとは午飯の座に着いた。料理人がトマトの這入つたライス・スウプを持つて來る。

『毎日同じだ。』とラアエウスキイは唸つて、『何故稀には酸つぱいキャベッジスウプを出さないんだ。』

『キャベッジが無いんです。』

『それは不思議だ。サモイレンコオだつてキャベッジスウプを喰べてゐる、マリア・コンスタンチノウナだつてキャベッジスウプを喰べてゐる。毎日毎日この甘つたるい泥々した奴を喰べなけりやならんのは俺一人だ。』

斯ういつた物爭は今までラアエウスキイとナデエダとの間に始終起つたものである。併し、女が厭になり始めてから、ラアエウスキイは何でもナデエダの爲る儘に任せて置いて見た。彼は努めて優しい丁寧な物の言ひやうをした、女の顏を見てニコ〳〵した、女を『可愛い奴め。』と呼んだ、そして女の額に接吻した。

『このスウプは甘草のやうな味がするね。』と、彼はニコ〳〵しながら言つた。彼は努めて親切に見せようとしてゐたが、如何にも抑へる事が出來ないで、『誰も內を整理する者は無いんだ……御前が實際病氣なら、それとも又本を讀むんて

忙しいんなら、俺が自分で臺所の事を爲よう。』

皆ては「あなた、妾の料理人になつて下さいよ。」と男に常談口も利いた女が、今は唯恐々男の顏を偸み見て、そして赤くなる。

『如何だね、今日は。』と、男が訊ねる。

『大分好いやうです。唯元氣が無いだけなの。』

『大事にしなくちやいかん。俺は非常に心配しとる。』

ナデエダは此間から加減が惡いのだ。サモイレンコオは間歇熱だと言つて、規尼涅を與れた。ウストモヰッチといふ、丈の高い、痩せた、愛敬の無い醫者は、何處か組織が惡くなつたのだと診斷して、それに依つて處方を書いた。ナデエダの病氣は常に男の憐愍と心配とを喚び起した、然るに今ラアエウスキイは、それをも假病ぢやないかと疑ふに至つた。彼女の黃いろい顏と、朦朧とした

眼附と、發作性發熱後の欠伸と、くる〳〵と子供のやうに縮かまつて寢るのが好きな事と、これらは相寄つて彼のイルウジョンを破つた、そしてこの上關係を密にしてはならぬといふ感じを起させた。

第二に出たのは菠薐草と堅く煮た卵である、併し、ナデエダだけはミルクプヂングを喰べた。彼女がチウ〳〵啜る音を聞いて、彼は嘔氣ついて來た。可哀さうな女だと思ひ始めた。情夫が情婦を殺す譯がぼんやり分つて來た。

『あゝ可愛い奴だ。』食事が終ると斯う言つて、彼はナデエダに接吻した。

そして、書齋へ這入ると、往つたり來たりをしながら、『逃げろ、逃げろ。關係を絶つて、そして逃げろ。』と呟いた。

彼は長椅子へ横になつて、最一度ナデエダの夫は自分の爲に死んだのだといふ事を考へた。

『惚れたからといつて人を責めるのは愚だ、又、厭になつたからといつて人を責めるのも愚だ。』と彼は自分で自分に說く。

『愛と憎ばかりは吾人の自由になるもんぢやない。あれの亭主の死んだ原因の一つは間接に俺であるかも知れない、併し、俺が彼奴の妻君に惚れ、彼奴の妻君が俺に惚れた爲に、俺が責められる道理は無い。』

やがて彼は立上ると、帽子を探して同僚シエシコウスキイの所へ出掛ける。

シエシコウスキイの宅へは、この町の官吏連が、骨牌をしながら冷い麥酒を飲みに、毎日寄合ふのである。

『俺の決心の定らない所は丸でハムレットだ。』と道々ラアエウスキイは考へる。

『シエエクスピアは本當だ。あゝ如何にも本當だ。』

(三)

ドクトル・サモイレンコオは公開の食堂を持つてゐた。これはこの町の生活の單調を破る爲である。この土地には一軒も料理屋が無い所から、新來の客はサモイレンコオ家の食卓に歡迎の椅子を見出すのが常である。

この頃サモイレンコオに賄を托してゐるのは、刺衝水母の發生學を研究しに、毎年夏になると黑海へ來る青年動物學者フオン・コオレンと、近頃の神學校出て、病氣の爲に隱退した老助祭の代りに、この小な町へ派遣されて來た助祭のボベドフとである。サモイレンコオ家の食事は二時に始まる——少くともサモイレンコオの命令は然うだ。

いつても一番先に遣つて來るのはフオン・コオレンである。彼は默つて客間の

椅子に腰を掛ける、卓から寫眞帖をとつて、太い洋窄を穿いて高い帽子を冠つた見馴れぬ男や、クリノリンを穿いてボンネットを冠つた女の、色の褪めた寫眞を一枚一枚丁寧に檢査する。寫眞帖の檢査が終ると、棚からピストルをとつて、左の眼を細くして、ヴオロンゾフ親王の肖像を狙ふ。然らずむば、姿見の前へ來て、自分のどす黑い顏や、大な額や、擽れた黑い髮の毛を檢査する。これは寫眞よりもピストルよりも嬉しさうである。彼は自分の顏を見て、綺麗に手入れのしてある自分の小な髭を見て、健康と强壯とを證據立てる自分の廣い肩を見て樂むのである。彼は又、自分の意氣な裝を見て、花模樣を散らした襯衣に映の好い自分の襟飾を見て、それから又、自分の黃いろい半靴を見て樂むのである。

フオン・コオレンが寫眞帖に夢中になつてゐる頃、サモイレンコオは上着も胴

衣も無して、胸も露に、苛々して、汗をかいて、廊下と臺所と食卓との間を駈廻つて、生菜か醤汁の準備をしながら、始終恐い眼をして手傳ひをする從卒を睨みつけてをる。

『醋を持つてこい。』と命令が下る。『それは醋ぢやない、阿列布油だ。』と、地團太を踏んで叫る。『何處へ行くんだ、間抜。』

『牛酪を取りに、閣下。』と、從卒はおろ〳〵して情ない聲を出す。

『もつと早くしろ。牛酪なら戸棚にある。それからダアリアに然言つて鹽漬の鏹へ最少し蒔蘿を入れさせとけ。蒔蘿だぞ、分つたか。クリイムに蓋をせんか、馬鹿、蠅がたかるぢやないか。』

家中が彼の叫聲で震動する計りである。二時十分前か十五分前に助祭が遣つて來る。彼は廿二歳になる、痩せぎすな、髪の毛の長い、顎鬚が無くてちよぼ

〳〵と見えるか見えない位口髭のある青年だ。客間へ這入ると、彼は、偶像の前で十字を切つて、ニコリとするかと思ふと、フオン・コオレンに手を呉れる。

食事は二時になつても用意の出來た事は決して無い。二人は、廊下から臺所へ、又臺所から廊下へ、從卒が長靴を引摺つて駈けて歩く音を聞く。またサモイレンコオの叫る聲を聞く。

『それは食卓の上へ置くんだ。何處へ持つてくんだ。まア先へそれを洗ふんだ』

助祭とフオン・コオレンとは、腹が減つて死にさうなので、もう辛抱が出來ぬとばかりに、芝居の三階の見物のやうに、手を叩いたり、踵で床を蹴つたりする。やゝ暫しすると、戸口が開いて、へと〳〵になつた從卒が、食事の用意整へる由を報告する。

二人が食堂へ這入ると、サモイレンコオは既に待つてをる。眞赤な顔をして、

寒所の熱氣で汗みどろになつてゐる。何だかぶり〳〵してゐて、二人を睨みつけてるばかりで、何を訊いても一向返事をしない。やがて、心配さうな顔をして、スウプの小鉢を持上げて、みんなの皿に注いで廻る。二人がそれをがつがつと喰べて、これは氣に入つたといふ風が見えると、やつと安心の吐息をついて、底の深い肱掛椅子へ腰を卸す。すると、顔が倦るさうになつて來る、脂じんで來る……と、徐にコップへブランディを注いで、『吾人青年の健康を祝さう。』と言ふ。

サモイレンコオは今心持が非常に好いのだ、それにも關らず、先刻ラアエウスキイと話した事を思ひ出して、ひどく沈んでをる。彼はラアエウスキイを可哀さうだと思つてをる。どうかして助けて遣りたいと思つてをる。

スウプを飲む前に、彼はもう一杯ブランディを引掛けながら、溜息をついて——

『僕は今日ワンヤ・ラアエウスキイに會つた。彼の生活は悲慘だ。彼は何の愉快も無くて生きてゐるのだ。僕は彼奴が可哀さうだ。』と言ふ。

『僕にはどうしても可哀さうだと思へない。』と、フオン・コオレンは言ふ。『彼奴が若し溺れかゝつてゐたら、僕はステッキでなほ突込んで遣るね、そして「溺れッ了へ、溺れッ了へ……」と言つて遣るね。』

『それは嘘だ。そんな事をしてはいかん。』

『何故いかんのだ。』と、動物學者は肩を聳かして、『僕は善を爲すに於いて、決して君に歩を讓る所はない。』

『君はそれを善といふのか——人を溺れさせるのを。』と、助祭は笑つた。

『ラアエウスキイを溺れさせるのをか。然うとも。』

『どうも、このスウプには何か足りんやうだ……』と、サモイレンコオは話題を轉じようとする。

『ラアエウスキイは社會にとつて虎列刺の黴菌程爾く危險な人物だ。』と、フオン・コオレンは語を續ける。『彼奴を溺れさせるのは確に善だ』。

『隣人の事をそんなに言ふのは、決して君の名譽ぢやないぞ。一體どうしてそんなに彼が憎いのだ。』

『愚劣な事を言ひ給ふな、ドクトル。黴菌を憎んだつて爲方がない、黴菌を輕蔑したつて爲方がない。僕は唯ラアエウスキイを惡漢だと思つてるのだ、僕は自分の思つてる事は決して隱さない。』

『惡漢……』と、サモイレンコオは眉を顰めながら呟く。『そりや君言ひ過ぎる……』

『でも人間といふものは、その行爲に依つて裁判されるものだ。』と、フオン・コオレンは尙語を次いで、『さア助祭君、君自分で裁判して見給へ……ラアエウスキイの生活は支那の卷物のやうに君の前に展がつてをる、君は始から終までそれを讀む事が出來るんだ。彼はこの土地へ來てから二年間何をしたと思つとる。まア數へて見給へ、先づ第一に、この町の人に骨牌を敎へた。二年前までは、この土地でこの手玩を知つてる者は一人も無かつた、今日では夜の更けるまで骨牌を遣らん者は一人も無い……女子供までが遣る。第二に彼はこの土地の人に麥酒を飲む事を敎へた、これも今までこの土地の人の知らなかつた事だ。また、この町の人は色々な種類の火酒と惡意になる事の出來たのを彼に感謝しなければならん、彼等はもう眼を塞いで火酒の種類別をする事が出來るやうになつた。第三に、この土地の人は今まで人の妻君と一緒に暮らすのを秘密でして

ゐた、決して公然はしなかつた、この土地は姦通を以て公開の展覽に不適當なものだと認めて來た。然るにラアエウスキイは先驅者として遣つて來た。彼は公然人の妻君と一緒に生活した。第四に……』

フオン・コオレンは急いてスウプを飲んで了つて、皿を從卒に渡す。

『僕は懇意になつたその月から、もうラアエウスキイが分つて了つた。』と、フオン・コオレンは助祭の方を向いて語を續ける。

『僕と彼とは同時に此所へ來た。彼の如き人間は誰とでも友達になりたがる、交際社會が好きなのだ、それに似た物が好きなのだ、何故ならば、骨牌をするにも、酒を飲むにも、飯を食ふにも、常に相手が無ければ氣が濟まんのだから。それに、自分が饒舌だから、聽手が入るのだ。僕と彼とは友達になつた、即ち彼は毎日のやうに僕を訪ねて來た、僕の爲事を妨げた、そして情婦の話をした。

僕は直ぐと、彼が非常な嘘吐きだといふ事に氣がついた。僕は彼が煩くて堪ちなかつた、僕は友人として、彼が酒を飲み過ぎる事、收入以上の生活をして借金を殖す事、何も爲ない事、何も讀まない事、何も知らない事などを攻擊した。總ての僕の攻擊に對して、彼は苦笑をしながら、《僕は不運な、不必要な人間だ……》とか、《君は吾人の如き傭吏の屑から何を期待するのか。》とか、《吾人は墮落しつゝあるのだ……》とか答へる。然うでなければ、オオネギンだとか、ペチョリンだとか、バイロンのカインだとか、バザロフだとかに就いて出鱈目な話を長々として、これらは肉に於いても靈に於いても吾人の先祖だ、といふやうな事を言ふ。彼は自分で酒を飲んだり、人に酒を飲ませたりして、それが爲に役所の務を疎にしながら、それに對して自分が責を負はうとしない。それは、彼の罪ではないんだ、オオネギンの罪なんだ、ペチョリンの罪なんだ、ツルゲ

エネフの罪なんだ。こんな不運な不必要な人間を作つたのは彼等なんだ。彼の放埒の原因は彼自身にあるのではない、何處か外に、遠くにあるんだ……それに……中々巧いんだ……彼ばかりではない、吾々も……《吾々今日の人間》、《吾々、鈍い、その癖神經質な備吏の子孫》……吾々も亦放埒だ、嘘吐きだ、猥淫だと言ふんだ。一言にして言へば、ラアエウスキイの如き偉大な人間は、その墮落に於いても亦偉大だ、といふ事を吾人は認めなければならんのだ。吾人は、彼が時代の犠牲であり、時代思潮の犠牲であり、遺傳の犠牲であり、それからまだ何かの犠牲であるが故に、彼の前に跪いて香を炷かなければならんのだ。總ての婦人は、彼の話に耳を傾けて、いつも《おお》とか《ああ》とか感嘆の聲を洩らした、併し僕には、シニックと話をしてゐるのか、大法螺吹きの野師と話をしてゐるのか、永い間一向分らなかつた。』

『默り給へ。』と、サモイレンコオが叫る。

『僕は僕の面前で、あの最も尊重すべき人物を罵る事を許さない。』

『まア待ち給へ、アレクサンデル君。』と、フオン・コオレンは冷に言ふ。『もう直結論にするから。ラアエウスキイの組織は非常に簡短である。彼の道德的特性は次の如くだ。即ち、午前は上靴と海水浴と珈琲だ。それから昼飯までは、上靴と運動と饒舌だ。二時になると、上靴と食事と酒だ。それから骨牌と嘘だ。さうして夜の十二時過ぎると、睡眠とla femmeだ。彼の生活は殼の中に這入つてる玉子のやうに、この短いプログラムの内へ畳み込む事が出來る。彼は歩くにも座るにも、怒るにも喜ぶにも、酒と骨牌と上靴と女とに關係してゐるのだ。女は彼の生活に於いて、重大な、生死に關る部分をなしてをる。彼自身の語る所によれば、彼は十三の時にもう戀をした。大學の新入生として、彼は既に或

婦人と同棲した、この婦人から彼は有益な感化を得た、彼に音樂の素養があるのはこの婦人のお蔭だ。二年級の時、彼は好からぬ家から女郎を請出して來て、自分の程度まで引上げた。即ち、女房にした。この女は六ヶ月彼と一緒にゐたが、再び元の古巣へ舞ひ戻つた。この女に棄てられた事は餘程彼が痛心の種となつたらしい、彼は煩悶の結果、大學を退學して、二年間何もせずに内にゐた。それから彼は或米亡人と仲が好くなつた、この米亡人は、彼に法科を廢めて言語學科に移れと勸めた。彼はその説に從つた。大學を出ると、今の婦人と馴染になつた。何といふ名の婦人だか、兎に角人の妻君だ……さうして、その婦人と一緒に、理想を追つてゞも來たやうに、このコオカサスへ駈落をして來たんだ。この女の厭になるのも、もう間のない事だらう、そして又ピイタアスバアグへ逃げて歸るんだらう……矢張理想を追つてね。』

『どうしてそれが分る。』と、動物學者を睨みながら、頰を膨らしてサモイレンコオが言ふ。

黄尾魚の煮たのに波蘭醬汁がついて出た。サモイレンコオは二人に黄尾魚を一つ宛取つて、自分の手で醬汁を掛けて遣る。

『誰の生活を見ても、婦人は重大な部分をなしてをるさ。』と、助祭が言ふ。『そりや爲方がない。』

『そりや然うさ、併し、程度があらうぜ。吾人にとつて見れば、婦人なる者は、母である、妹である、妻である、或は友人である――ラアエウスキイにとつては、婦人はこれらの總てゞあつて、しかも同時に又皆情婦である。彼の生活が不愉快な時は――女が惡いのだ。彼の生活に新しい光が見えた時、彼が新しい理想を見出した時は――矢張そこらに女がゐるのだ……本を見ても、繪を見ても、

その内に女が描いてなければ、彼の心には何等の感じを與へないのだ……彼の意見によれば、吾人の時代は、戀愛と熱情とのエクスタシイに我を忘れるといふやうな事がないから、非常に悪い時代なんださうだ、彼が若し學者か文學者であつたら、必ず「十三世紀の婦人」とか、「古埃及に於ける賣淫」とかいふ論文を公にして、世界の文章を豐富にしたらう。僕は斯の如き肉感的な人間の頭腦には、一種特別な肉塊があるに違ひないと思ふ。交際場裡に於けるラアエウスキイを好く注意して見給へ。或一般的な問題が話頭に上つてる間は、彼はいつも隅ッこへ引込んで、默つて、茫然して、詰らなさうな顔をしてをる。併しながら、女の話が始まると、眼が光つて來る、顔が元氣づいて來る。人間が醒めて來る。彼の思想は總て、どんな高い事でも、どんな貴い事でも、みんな女から出て來るんだ。』

助祭は思はず吹出して、大笑ひに笑つた。サモイレンコオは、額を顰めて、笑ふまいとするやうに顔を感めたが、堪へる事が出來ないで、到頭くッくと笑ひ出した。

『嘘だ、嘘だ。』と、彼は涙を拭きながら言ふ。『そりやア嘘だ。』

『彼奴は汚い奴だ、曲つた奴だ。』と、動物學者は尙語を續ける。助祭は又可笑しな話が始まるだらうと思つて、凝と彼を見詰めて、又笑ひ出す。

『笑ひ給ふな、助祭君。』と、フオン。コオレンは言ふ。『有害でもなく危險でもなければ、誰があんな人間に注意するものか。彼奴は女にかけて成功するから危險なのだ、彼奴はこの上尙幾多のラアエウスキイを以てこの世界を充さうとしてゐるから危險なのだ。だから彼奴は傳染病毒だと言ふんだ。サアカシアの人間は教育と文雅といふものを信じてをる。見た所才學のある立派な紳士の爲る

事だから、彼の行爲は總て正しいもの總て宜しきを得たものと認められてゐるのだ。彼等は彼の爲す事は何でも善だと信じてゐるんだ。しかも彼は《不運な、不要な人間》なんだ、時代の犧牲なんだ、といふ意味は、彼は何を爲ても許されるといふんだ。彼は親切な愛すべき人間だ、だから人間の弱點に對して嚴でない。彼は俠氣を持つてゐる、素直だ、腰が低い、決して横柄でない。誰とても酒を飲む、誰とても猥褻な話をする、誰とても蔭口を利く……一體、宗教に於いても道德に於いても、神人同形説に傾いてゐる連中は、自分の弱點と恰ど同じやうな弱點を持つてる神を最も多く愛するものだ。さア、どんなに廣い傳染病毒の蔓延區域を彼が有してをるか、君自身で判斷して見て呉れ給へ。しかも彼は立派な役者だ、巧な僞善者だ、彼は好く商賣を心得てをる。嘘だと思ふなら彼の詭辯に注意して見給へ——例へば文明に關する説だ。彼は文明の匂も嗅

いた事のない人間だ、然るに彼は、《ああ、如何に吾人は文明の害毒を被つたらう。吾人は寧ろ蠻人を羨む、文明の何たるかを知らざる自然兒を羨む。》などと言ふ。この語に依つて見ると、彼は嘗て全精神を文明に捧げた事があるのだ。彼は文明に服事したのだ、奥の奥まで文明を理解したのだ、併しながら文明は、彼を疲らしたのだ。彼の迷を破つたのだ、彼を欺いたのだ。ね、彼はフアウストだ、第二のトルストイだ……ショオペンハウエルやスペンサアなどに至つては殆ど子供扱だ、この人達の肩を親父らしくポンと叩いて、「どうした、兄弟。」などと言ふ風なんだ。勿論、彼はスペンサアを一行も讀んだ事はないのだ、併し彼が、自分の情婦の話をして、《あれはスペンサアを讀みますよ。》などゝ、知らずに皮肉を言ふ時は、如何にも可愛く見える。だから皆が彼の言ふ事に耳を傾けるんだ、そして、この野師はこんな風にスペンサアの事を話す資格が無い

計りてなく、實はスペンサアの靴の底を舐める權利さへ無いんだといふ事を、誰も知る者は無いんだ。』

『フオン・コオレン君、一體彼は君に對して何を爲たんだ。何故君はそんなに彼に反對するのか、僕には些とも分らん。』と、動物學者を苦々しげに見ながら、サモイレンコオが言ふ。『彼だつて一個の人間だ。そりや弱點の無い事はない。併しながら、近世思想と同じ水平線に立つてをる人間だ。政府に勤めてゐる人間だ。國家にとつて有用な人間だ……』

『澤山。澤山。』と、動物學者は遮る。『君は彼が政府に勤めてをると言ふ。併し、彼は果してどういふ勤め方をしたらう。彼がこの土地へ來てから、法令が改善されたらうか、彼が此處へ來てから官吏が緻密になつたらうか、忠實になつたらうか、丁寧になつたらうか。否、却つて彼は、才學ある大學出身者の權威を

以て、彼等の放埒を是認し、彼等の不潔に加ふるに自己の不潔の拾ハンドレドウエイト（一ハンドレドウエイトは我が十三貫五百四十八匁）を以てした。彼が正確なのは月給日の廿日だけだ。外の日は、一日だつて何も爲やしない。たゞ上靴をガタ〳〵引摺つて歩いて、自分のコオカサスに住んでをる事が何か露西亞政府に非常な貢献でもしてゐるやうな顔附をしてゐるばかりだ。いんや、アレクサンデル君、彼の肩を持ち給ふな。君は誠實でない。君にして若し眞に彼を愛するならば、眞に彼を友人と思ふのならば、彼の弱點に無頓着なる能はざる筈だ、彼の弱點を許さない筈だ、彼自身の利益の爲に、彼を無害な人間にしなければならん筈だ。』

『然らば。』

『どうして彼を無害な人間にすると訊くのか。彼は矯正し難い人物であるから、

彼を無害な人間にするには唯一つの方法有るのみだ……』と、フオン・コオレンは指で咽喉を横に切つて、『然らずんば溺死せしめよさ……』と、附加へる。『萬人の利益の爲に、斯やうな人間は滅ぼさるべきだ。』

『何を君は言ふのだ。』と、サモイレンコオは思はず身を起して、動物學者の冷靜な顏に驚きの眼を据えながら、早口に言ふ。『君は氣でも違つたか……助祭君、コオレン君は何を言つてるのだらう。』

『僕は死刑を主張しやしない。』と、フオン・コオレンは急いで言ふ。『死刑がいけなければ、他の方法を考へ出すまでさ。若し如何してもラアエウスキイを滅亡する事が出來なければ、宜しい、その時は彼を棄てるさ、彼の人格を排斥するさ、彼を工場に送るさ……』

『何を君は言ふのだ。』と、驚いてサモイレンコオは又同じ事を言ふ。『あ、胡椒

をかけて、胡椒をかけて。』と、胡椒をかけずに詰物をした甜瓜を喰べてる助祭を見て、彼は情ない聲を出す。『何を君は言ふのだ。才あり矜ある吾人の友を、君は工場へ送ると言ふのか。』

『若し彼に矜があつて反抗したら、鎖で縛り上げるさ。』

サモイレンコオは呆れて口を噤んだ。彼は唯指を弄ぶばかりである。助祭はそのポンとした可笑しな顏を見て、又笑ひ出した。

『もうこの問題は廢めにしよう。』と、動物學者は言ふ。『が、たゞ一事を記憶して置いて貰ひたい、アレクサンデル君。原始時代の人類は、生存競爭に依つてラアエウスキイの如き人間を防いでをつた。吾人のカルチユアは著しくその競爭の度を減じた、故に吾人は、これらの柔弱な不用な人間が滅ぼされるか、或はラアエウスキイの蕃殖に依つて文明が滅びて人類が悉く墮落の底に沈むか、

この何れかを待たなければならない。これは全く吾人の罪だ。』

『若し人間を溺らしたり絞つたりしなければならないんならば、』と、サモイレンコオは言ふ。『君の文明と君の人類とはくだらん物だ。實にくだらん物だ。僕は君に眞理を言つて聞かせよう。君は學問もあり才智もある人物だ、國家の誇だ。併し獨逸人は確に君を害した、然り、獨逸人。獨逸人。』

サモイレンコオは、醫術を學んだドルバアトを去つて以來、殆ど獨逸人に會はなかつた、又獨逸の本も決して讀まなかつた。併しながら、彼の意見に依ると、政治及び學問に於ける害毒はみんな獨逸人から出て來るのだ。如何してこんな意見を起したのか、それは自分でも説明出來ないのだ。が、兎に角、この説を固守して動かないのだ。

『然り、獨逸人。』と、彼は又繰返す。『さア、行つて茶を飲まう。』

三人は、立上つて、帽子を冠ると、外へ出て、白楓と梨と栗との樹蔭に腰をかけた。動物學者と助祭とは、小さな卓の前のベンチに腰をかけた、サモイレンコオは、廣い、寄掛りの斜な臂掛椅子に腰を沈めた。從卒が茶とジェリイと、それから里克兒酒を一本持つて來る。

『今頃茶を飲むのは好い心持だ。』と、サモイレンコオは吐息を深くついて、滿面に笑を湛へて言ふ。『全く好い。』

その日は非常に暑かつた。大氣はそよとだにしなかつた。蛛の巣が靜に栗の樹から垂れてゐた。

助祭は、いつも卓の側の地面に置いてあるギタアを取上げて、調子を合せ、好い聲で、『敎へ子は酒亭の傍に立てり。』と唄ひ出した。だが、彼は直ぐと止めた。彼は額の汗を拭つて、燃えるやうな青空を仰いだ。

サモイレンコオは居眠をし始めた、彼は暑熱に疲れて眩暈がして來たのだ。彼の手はだらりと下つた、彼の眼は閉ぢて了つた、彼の頭は胸に垂れた……彼は悲しさうな顔をして、フオン・コオレンと助祭とを見上げて、そして呟くやうに言つた——

『青年諸君……學界の星と教會の光……見給へ、牧師總監が長いハレルヤを唄ふ……吾人は祭礫に接吻しなければならん……え、何故爲ない……神よ、彼を許し……』

彼は直と斛をかき始めた……

フオン・コオレン と助祭とは茶を飲み終つて、町へ出かけた。

『君は港へ 蛸斗をとりに行くんか』と、動物學者は訊く。

『いんや、今日は暑過ぎる。』

『それぢや僕の部屋へ來給へ。僕の部屋へ來て、僕の爲に何か片附物をして呉れ給へ、それから何か寫し物をして呉れ給へ、序に如何したら君が忙しくなるか相談して見よう……助祭君、君は働かなければいかん。こんな風で日を暮してはいかん。』

『それは君の言ふ通りだ。』と、助祭は言ふ。『併し僕の怠けるのは、現在の境遇の致す所だ。將來の不安が、非常に人を冷淡にするといふ事は、君も知つてゐる。僕がこの土地に永く留るべき人間か如何か、知る者はたゞ神のみなんだ。僕は不安に此處に暮してをる。妻は妻の父の所に寂しく暮してをる。實を言へば、暑熱で僕の頭は餘程弱つた。』

『そんな馬鹿な事はない。』と、動物學者は言ふ。『暑熱には直に馴れる。妻君のゐないのにも直に馴れて來る。腐つてはいかん。自分で自分を鞭撻せにやいかん。』

(四)

或朝、ナデ・ロウナは海水に出掛ける。下女のオルガは水壺と銅の金盥とタオルと海綿とを携へて、後から隨いて行く。

白い煙突の汚く煤びた、見馴れない汽船が二艘、碇泊所に繋つてゐる、確に外國船だ……

白い着物を着た男達が、佛蘭西語で何か大聲に叫りながら、波戸場の近所を往つたり來たりしてゐると、船からも大な聲で何か答へてゐる……

町の小な寺の鐘がガン〳〵鳴つてゐる。

『成程、今日は日曜日だ。』と思ふと、ナデエダは嬉しかつた。

彼女は非常に好い氣分なのだ。何か心嬉しい休日らしい氣持がしてゐるのだ。

盛裝をして、大な麥藁帽子を冠つて、その麥藁帽子の廣い緣が兩方の耳の方へ反り曲つて、恰ど顏の額緣になつてゐる所は、必と人が見て美しいに違ひないと、彼女は自分で然う思つてゐる。彼女は考へた、この町には唯一人しか、致育のある、美しい、若い女はゐない——それは自分だ。人の氣を引くやうに、趣味のあるやうに、しかも經濟に着物を着る方法を知つてる者も自分ばかりだ。例へば今着てゐるこの着物の如きも、實は唯八十二ルウブルしか費つてゐないのだけれども、素張らしく立派に見えるぢやないか。又この町中で人を喜ばせる方法を知つてる者も、自分一人だ、そして、この町には大勢男がゐる、だから、皆ラアエウスキイを羨ましいと思つてるに違ひない。

彼女はラアエウスキイが近頃冷淡になつたのを喜んでゐる。一時は彼の態度や、彼の侮蔑に對して、泣きもした、怨みもした、もう何處かへ行つて了ひま

すと嚇した事もあつた。が、今では唯顔を赤めて、憎らしげに彼を睨む位が關の山で、却つて男の不親切を喜んでをる。寧ろ、もつと亂暴な取扱がして貰ひたくなつてをる。彼女は夫の理想――ピイタアスバアグを去つてコオカサスへ來るといふ夫の意見――に同情の念の無いのを、自分と自分で叱つた。そして夫の怒つてる原因はこれだと信じてをる。この町へ旅をして來る道すがらも、彼女は、海岸に居心の好い家を持つて、木蔭のある、鳥の來て啼く、流の清らかな心持の好い小さな庭で、草花や野菜を栽培したり、また子鴨や鷄の雛を育てたり、近所の人を招いたり、貧乏な百姓達を訪ねて本を頒けて遣つたりしようと計畫して來た。が、來て見るとコオカサスといふ所は、禿山と森と大な谷ばかりで、せつせと長い間働かなければならない所だつた。御近所の人といふ者が無い、暑熱は非常だ。サアカシア人は人から家庭を奪ふものだ。

ラアエウスキイは別に忙てゝ位置を求めようともしなかつた。これは彼女の喜ぶ所だつた。二人は働いて生活するなどといふ事に就いては、互に一言も言ふまいと、默契してでもゐるように見えた。彼は默つて計りゐた。彼女は自分が物を言はないので、それて男が怒つてるのだと思つた。

彼女はラアエウスキイに内證で、この二年の間に、アフミアノフの金庫から、もう三百ルウブルも借りてゐる。今度は洋服地、今度は日傘と、僅なものが積り積つて、つひこんな高になつて了つたのだ。

『今日は何も彼もすッかり言つて了はう。』と彼女は決心した。が併し、昨今のやうに不機嫌な所へ、借金の話を持出すのは決して得策でないと直ぐ氣がついた。

外にもう一件少からず彼女を苦しめてゐる問題がある。ラアエウスキイの不

在中に、士官のキリリンを二度家へ上げた事だ。ナデエダはこれを思ひ出すと、さッと顔を赤らめて、下女の方を振返つた、自分の心を讀まれやしないかと恐るゝものゝやうに。

永い暑い晝間。美しい蒸暑い夜。自分の若さと美しさとを怠けて夢に見るか考へるかするより外、何も出來ない程倦い時。ラアエウスキイの冷淡——總てこれらが力を協せて、女の心中に、嘆美と滿足とを求むる慾望を喚起した。キリリンは巧い時に近づいたのである。

彼女は單調な生活に於ける變化の一つとして、士官の媚を歡迎した。彼女は何も惡い事をしてるやうな氣がしなかつた。蓋し彼女の心は動かされなかつたのである——彼女は尙ラアエウスキイを愛してゐるのだ。彼女は、男が留守だと氣が沈んで寂しいのは、自分に嫉妬があるからだといふ事もよく知つてゐる。

それに第一キリリンは馬鹿だ、甘くも酸ッぱくも何ともない人間だ。二人の間には今何も無い。過去は過去だ。

婦人が海水をする小屋は唯一つしか無い。男は野天で海水をするのだ。ナデエダが小屋へ這入ると、例の官吏の妻君、マリア・コンスタンチノウナ・ビッゴオワと、十五になるその娘のカチヤとがゐた。二人はベンチに腰をかけて着物を脱いでゐる。

マリア・ビッゴオワは、人の好い、感情的な、狂熱的な、華奢な婦人で、ゆつくり然も感じたらしく物を言ふのが癖だ。彼女は長く家庭教師をしてゐたのだが、卅二の時、馬鹿に大人しい、頭の禿げた小男と結婚した。彼女は今も尙昔に變らず夫を愛してをる、そして自分の幸福であるといふ事を、何かといふと人に見せたがる。

ナデエダの姿を一眼見ると、『おや。』と熱心に言つて、懇意の内に名高い《巴且杏表情》といふのを遣る。『まア、嬉しい。さ、御一緒に這入りませう。』

『今日は昨日程お暑くございませんのね。』と言ふ途端に、着物を脱がせてゐた下女が體に一寸手を觸つたので、ナデエダはびくりッとして、『昨日は暑くて死にさうでございましたわ。』

『ほんとに然うでございましたのね。私なども息が窒つて死んぢまふかと存じましたわ……まア、嘘のやうですけれど、私昨日は三度海水を致しましたの……ねえ貴方、三度でございますよ。流石のニコヂンも怒りましてね。《マッシャ、そんなに這入つたら色が黒くなつて爲やうがない。》ッて、ねえ貴方。』

《こんな不器量が又と二人あるものか。》と、ナデエダはこの女の顔を見ながら心の内で然う思ふ。カチャに就いては《でも娘の方が餘ッ程好く出來てる。》と

思ふ。と、大な聲を出して、『貴方ん處のニコヂンさんは本當に本當に可愛くて入らッしやるのね。私ほんとに惚れッちまひましたわ。』

『ハ、ハ、ハ。』と、マリアは無理に笑つて、『まア嬉しい。』

外の婦人はみんな嫌厭の情を以て自分を見てゐるんだ、とナデエダは感じた。彼等は皆自分を恐がつてゐるのだ、と思ふと、彼女は氣が沈んで來た、そこで自分で自分を尊敬して氣を引立てようと——

『ピイタアスバアグでは唯今田園生活が大流行なのですよ。内も私もピイタアスバアグには知つてる人が多勢ございますの。』と言ふ。

『貴方の何は機關手さんで入らッしやいましたね、然うぢやございませんでしたかしら。』と、恐々マリアが訊く。

『私はラアエウスキイの事を申してをりますのよ。内は隨分知つてる人が澤山

ございますの。然れども、悲しいことに、母が傲慢な貴族で……』

と言ひも終らず、ざんぶと水へ飛込んだ。マリアとカチャも直ぐと後を追ふ。

『この世の中には隨分間違つた事が澤山ありますのねえ。』と、ナデエダは語を續げる。『それに人生といふものは樂のやうに見えて決して樂なものぢやございませんのね。』

『それはもう、然うですとも。』と、マリアは言ふ。マリアは嘗て貴族の家に家庭教師として仕へてゐた事もあり、多少世の中の味も知つてゐるのだ。

『嘘のやうですけど、ねえ貴方、ガラチンスキイの屋敷などでは、晝餐は勿論、朝御飯にまで正禮服で出ろといふ命令なんですの。ですから、月給の外に衣裳料といふのが出ますの、まるで、女役者ですわねえ。』、

彼女は娘の撥ねかす水が、ナデエダに掛からぬやうにと、ナデエダ・フエドロウナとカチャとの間に割込む、海に向いた開き戸から百ヤアドも向うを、誰だか一人泳いでるのが見える。

『おかアさん、あれ内のコスチャよ。』と、カチャが叫ぶ。

マリアは吃驚して泣き聲を出し始めた。『コスチャ。』と呼ぶ。『歸つといでようコスチャ。歸つといでよう。』

コスチャは阿母さんと妹とに天晴見せびらかす積りか何かて、更に潜つたり泳いだりしたが、やがて草臥れて、急いで歸つて來た。

『ほんとに男の子ては泣かされますんですよ、ねえ貴方。』と、やつと安心したマリアが言ふ。『いつ何時首根つこを折るか分らないんですもの。嘘のやうですけれど、私共がまだリベックにをりました時分に、或日の事、コスチャは高い

樹へ登つて、降りて來る事が出來なくなつて了つたんですよ、それで、百姓に登つて貰つたり何かして、大騒ぎを致した事があるんですの。ほんとにねえ貴方、母になるのは嬉しいやうなものゝ、又隨分辛いものですのねえ。些とした事にも膽を潰さなければならないんですからねえ。』

ナデエダ・フエドロウナは麥藁帽子を冠つて、海へ乘り出した。彼女は可なり遠く泳ぎ出たが、やがて又引返して來た。水平線まで海が廣々と見える、蒸汽船、海岸の人、町――總てこれらの景色が、暖い空氣と穏な波とで彼女の魂を動かした、そして、或者が彼女の耳に囁いて、「生きろ、生きろ……」と言つた。帆を張つた小舟が一艘、船首で波を突切つて、彼女の側を矢のやうに通り過ぎる。舵を取つてる男が凝と彼女を見た。彼女は見られたのを心嬉しく感じた。

海水を終へると、婦人達は着物を着て、一緒に町の方へ歩き出した。

『私は一日暑さに熱が出ますの、けれども些とも痩せませんのよ。』と、ナデエダは鹹辛い唇をべろりと舌で遺りながら、そして、道で遇つた懇意の人の御辭儀に微笑を以て答へながら言ふ。『私は昔からずつと肥つてをりましたの、この頃は又肥つたやうなんですよ。』

『やッぱり肥る質で入らつしやるんですわねえ。あら、御帽子が濡れてをりますよ貴方。』

『拂ひませんわ。直乾きませう。』

マリアは自分の家の門口で立止つた。

『お寄り遊ばせな、ねえ貴方。』と勸める。

『有難う存じます。』と、ナデエダは遠慮をしなかつた。『私お宅に上るのが樂し

みですの。』

マリアはナデエダに座を與へて、珈琲と牛酪のついた捩麵麭を出した。それから以前の弟子の寫眞を見せた――ガラチンスキイの令嬢達で、今では皆嫁いでゐる。又、娘のカチヤと悴のコスチヤとの「學校通信簿」を見せた、中々成績が好い。

マリアは、ナデエダのゐる事が、コスチヤやカチヤに惡い感化を與へはしないかと氣を揉みながらも、氣の毒な人だと思つて精々優遇する。でもまだニコヂンがゐなくて仕合だと思ふ。

ナデエダと話をしてる間に、マリアはその晩野遊會のある事を思ひ出した。然れども、フオン・コオレンから、ラアエウスキイとナデエダ・フエドロウナとだけには呉々も洩らして呉れるなと頼まれてゐる。が、彼女は我を忘れて、猫を

袋から逃して了つた。彼女は狼狽の色を隠さうとして、『貴方も入らつしやいましよ。』

(五)

野遊會の目的地は、南の方へ五六哩離れた、黑河と黄河との合する所で、サアカシアの或旗亭に近い場所だつた。

一同は夕方の五時を合圖に出發した。一番初に來るのは遊歩馬車に乘つたサモイレンコオとラアエウスキイとである、それからマリアとナデエダ・フエドロウナとカチヤとコスチヤとが三頭曳のトロイカで遣つて來る、この馬車に食糧や食器の這入つた籃が載つてゐる。その次の馬車には士官のキリリンと若いアフミアノフとが乘つてゐる、このアフミアノフはナデエダが三百ルウブル借りてゐる商人の息子だ。その向側に注意深い小男のニコヂン・アレクサンドロヰッチが土耳古風に足を組んでゐる。フオン・コオレンと助祭とは行列の一番殿

をして來た、魚を一杯盛つた籃が助祭の足下に置いてある。

『みーみー右。』と、サモイレンコオは、荷馬車か驢馬に乘つたアルバニア人に逢ふ度に、聲のある限りを出して叫つた。

『もう二年計り經つと、多少生活も樂になるだらうから、僕はエクスペヂションに出掛ける積りだ。』と、フオン・コオレンは助祭に向つて言ふ。『先づウラヂヲストックから、海岸に附いてベエリング海峽へ出て、海峽からエニセイ河の河口へ出るんだ、地圖を畫くんだ、地方動物と地方植物との研究をするんだ、特にその地方の地質學を研究するんだ、人類學的並に人種學的の攻究をしながらね。君も行くなら一緒に行かんか。』

『そりや出來ん。』と、助祭は言ふ。

『何故だ。』

『僕は自分一人の主人ではない。家庭の一員だ。』

『なアに、君の妻君なら出して呉れるよ。妻君が喰べるだけの事は僕等が如何にかしようぢやないか。社會公衆の利益の爲に妻君を尼にして了ふ事が出來れば尙結構だ。さうしたら、君は雲水になつて、本當の坊主としてエクペヂションに出掛ける事が出來るぢやないか。僕は君の爲に盡力するぜ。』

助祭は默つてゐた。

『君は神學を熟く知つてるか。』と、動物學者は訊ねる。

『あまり熟く知つとらんね。』

『ふうむ……どうもその方面の補助は出來んね、僕は神學に就いては丸て知識が無いんだから。君が入るだけの本の目錄を書いて僕に呉れ給へ、冬になつたらビイタアスバアグから必と送つて上げる。君はいろんな傳道師の旅行記を悉

く讀む必要があるね――旅行傳道師の中には隨分好い人種學者がゐるぜ。それを讀んでからだと餘程爲事が樂だ。もう一時も猶豫する時ぢやない、僕の部屋へ來給へ、兩脚規と六分儀の使ひ方を覺えようぢやないか。君は氣象學を知らなくちや駄目だ。』

『成程……』と、笑ひながら助祭は呟く。『然れども、僕は既に中央露西亞に或地位を求めてゐるのだ、高級牧師たる僕の伯父もその爲には盡力しようと約束してるんだ。僕が君と一緒に出掛けて了つたら、伯父の好意を無視する事になるだらう。』

『何を君は躊躇してゐるんだ。世間並の助祭のやうに、安息日ばかり働いて、外の日はいつでも休んでるやうな、そんな生活をいつまでも續けて行つたら、十年經つたつて今より偉くはならんぜ。そりや今より長い髯は生へるかも知れ

ん。然れども、エクペヂションは君といふ人間を必と新しくする、君は或事を爲遂げたといふ意識に於いて、必と富者になる。』

二人は婦人の馬車から聞える恐怖に歡喜を交へた叫聲で、話の邪魔をされた。馬車は今殆ど垂直な絶壁を通して切り開かれた道を走つてをる、一枚の釣柳のやうな道は今にも深い谷底へ眞逆に皆を落しさうである。右には海が開けてゐる、左には高い凸凹した絶壁を蔓のある植物が匍つてゐて、恰どそれが赤い血管のやうに見えてをる。素敵もない景色だ。

『何故僕は君等と一緒に此處にゐるのだらう。』と、ラアエウスキイは言ふ。『僕は馬鹿だ、卑しい人間だ。僕は今自分自身を救ふ爲に北方へ走り去らなければならん人間でゐながら、斯うやつてこの暢氣らしい野遊會に加はつてをる。』

『まア見給へ、このパノラマを。』馬が左へ折れて、黄河の谷が、その黄いろい、

濁つた、狂奔する小な流を以て現れた時に、サモイレンコオはラアエウスキイに向つて、斯う言つた。

『サツシヤ、僕は少しも美しいと思はないね。』と、ラアエウスキイは答へた。

『自然を嘆美して止まないのは想像力の貧弱な證據だ。僕の空想に比較すれば、總ての川、總ての岩、悉くノンセンスだ――ノンセンスより外のものぢやない。』

馬車は今川の岸に沿うて走つてをる。高い山の側面と側面とが段々に近寄つて來た。谷が段々に狹くなつて來て、峽へ來たやうな氣がする。馬車の通る直ぐ側の山は、大な岩が自然に積重つて出來てるやうに見える。サモイレンコオはこれらの景色を見る度に唸つた、それ程彼には印象が深かつたのである。凄いやうな美しい山は、狹い裂目や峽て所々斷えてゐる。峽を通して外の山々が褐色に、薔薇色に、ゆ、た空色に見える、何れも落日の光を浴びて。

『ああ呪ふべき山々よ。』と、ラアエウスキイは溜息をつくやうに言ふ。『もう僕は山に倦んだ。』

黒河が黄河へ流れ込む所、インキのやうな水が黄いろい水と爭つて黄いろい水を汚す所に、露西亞の國旗を屋根の上に掲げた或韃靼人の旗亭がある。店先に出した看板には、チョオクで『歡迎亭』と書いてある。この店はケルバライといふ韃靼人が持つてゐるのだ。垣根で仕切つた小な庭があつて、その庭に食卓やベンチが据えつけてある、刺々と生繁るに委せた灌木の中から、唯一本こんもりと美しい糸杉が聳え出てゐる。

氣の利いた小男の韃靼人ケルバライは、青襯衣を着て、白の前掛をして、往來へ出てゐて、馬車の一行が通りかゝると、兩手を腹に當てゝ低い御辭儀をした。彼が笑つた時に白い綺麗な齒が見えた。

『どうした、ケルバライカ。』と、サモイレンコオは叫る。『今日は少し先へ行くんだ、貴樣は後から直ぐサモワルと椅子を五六脚持つて來い。直ぐだぞ。』

ケルバライは、短く刈り込んだ頭で、二三度頷いて、何か言つたが、それは最後の馬車に乘つてる人にしか分らなかつた。

『鱒がございます、閣下。』

『持つて來い、持つて來い。』と、フオン・コオレンが叫つた。

馬車は旗亭から殆ど五百ヤアドも來た所で止つた。サモイレンコオは小な草原を見つけた、其處には飛々に岩があつて、恰ど都合の好い腰掛になつてゐた。嵐で吹倒された樹が一本、根を出して倒れてゐた、その刺は悉く黄いろく枯れてゐた。粗末な木の橋が小な流に懸つてをる、その向岸には四本の低い杭で支へられた小な納屋がある、これは玉蜀黍を乾す小屋だ。

野遊會の一行に與へた第一印象は、牢屋へ這入つたやうな感じであつた。右にも左にも前にも後にも山がある、旅亭とこんもりした糸杉との見える方角から、夜の影は刻一刻と這ひ寄つて來て、狹い、高低のある、黑河の谷を、尙一層狹く見せた、高い山々を尙一層高く見せた。河は謐く、蟬は絕間なく泣く。

『まア好いこと。』と、マリア・コンスタンチノウナは言ふ、うつとりと空氣を深く吸ひ入れながら。『子供達、御覽、まア綺麗だこと。まア寂だこと。』

『然う、全く綺麗です。』と、ラアエウスキイは調子を合せた。『然う、綺麗です。』と、彼は又繰返して言ふ。

『とても描寫は出來ませんねえ。』と、マリアは泣くやうに言つた。

『何故そんな事を考へるのです。』と、ラアエウスキイは訊ねる。『印象は如何なる描寫にも優つて好いものです。印象といふ方法に依つて總ての人が自然から

受けるこの豐富な色彩と音響とは、作家の醜劣な受け入れ難い形式に依つて下らなくされて了ふのです。』

『然うかしら。』フオン・コオレンは一番大な石を擇んで、それを腰掛にしながら、冷淡に斯う訊ねた。

『然うかしら。』と、ラアエウスキイを睨みつけながら、彼は又繰返して言ふ。

『では「ロメオ、エンド、ジユリエット」はどうなのだ。例へばプシキンの「ウクラインの夜」はどうなのだ。自然はこれらの作の前へ來て、その膝を屈しなけりやならんぢやないか。』

『そりや然うさね。』と、ラアエウスキイは同意した、彼はもう氣が惰けて、考へたり議論したりする勇氣が無くなつて了つたのである。『だが併し、』と、暫く默つてゐた後で、又語を續けて、『要するに「ロメオ、エンド、ジユリエット」が何

てある。美しい、詩的な、神聖な戀愛――即ち腐を隠した薔薇ぢやないか。』

メオだつて、有らゆる他の人間に同じく、一箇の野獸たるに過ぎないのだ。』

『何の會話をしても、君は直ぐ問題を……』と言ひかけて、フォン・コオレンはカチヤの方を振向くと、默つて了つた。

『問題を何に轉ずると言ふのだ。』と、ラアエウスキイは訊ねる。

『うむ、或人が君に向つて《荷荷の房は綺麗なものですね。》と言ふとするね。すると君は必と斯う言ふだらう、《成程綺麗です、併しながらチウ〳〵吸はれて胃腑の中で消化される時は餘り綺麗なものぢやありません。》て。何故君は然う言ふ議論の爲方をするのだ。少しも新しい所は無いぢやないか。それに……何れにしても可笑しな論法だ。』

ラアエウスキイはフォン・コオレンが自分を嫌つてる事を知つてをる、そして、それを知つてるが爲に、彼はフォン・コオレンを恐れてゐた。彼は自分の眼の前に大勢の人がゐるやうな氣がした、誰か自分の肩の直ぐ後に喰附いて立つてるやうな氣がした。彼は何も答へずに其處を離れて、そして、ああ來なけりや好かつたと思つた。

『諸君、枯枝を探して來て呉れ給へ、焚火をするのだから。』と、サモイレンコオは號令をかける。

連中はみんな違つた方角へ散つた。キリリンとアフミアノフとニコヂンだけ後へ殘つた。ケルバライが椅子を持つて來た。そして地面に絨氈を敷いて、酒の瓶を少し並べた。キリリンは丈の高い堂々たる男だ、雨でも天氣でもリンチルのスモック、フロックの上に袖無し外套を着て尊大に構へた所は、どうしても田舍の警察署長だ。彼は實際署長と同じやうに頑固だ、それに聲に幅があつて、

少し嗄れてゐる。酒の瓶と旅亭の食卓を一目見ると、彼は例の癖で何か喧しく言ひ出した。

『畜生、貴様の持つて來たのは、こりや何だ。』彼はケルバライの方を振り向いた。『俺は酒を持つて來いと言うたんだぞ――貴様が持つて來たなこりや何か、糞糊粗人。え、こりや何かよ。』

『内から持つて來たのが澤山あるから好いぢやないか、キリリン君。』と、ニコヂンは物柔に言ふ。

『持つて來た酒が何か。俺は俺で自分の酒が入るんだ。この野遊會の一員として遣つて來た以上は、俺にも割前を拂ふ立派な權利があると思つてをる。酒を十本持つて來い。』

『何故そんなに澤山。』と。ニコヂンは黙いて訊ねた、彼はキリリンが一文無しで來てゐる事を知つてゐるのだ。

『いんや。二十本持つて來い。』と、キリリンは叫つた。

『拂はんさ、好いよ。』と、アフミアノフはニコヂンに囁く。『僕が拂ふから。』

ナデエダは陽氣な浮々した氣持であつた。駈け出したい、笑ひたい、大な聲が出したい、戯けたい、浮氣がしたいといふやうな氣持だつた。青い星を散らした輕いモスリンの着物を着て、小な紅い上靴を穿いた所は、可愛く、身輕に活潑で、恰も蝶のやうに見えた。彼女は危い橋を駈けて通つて、眼の廻るまで水を眺めた。それから、笑ひながら、向岸へ駈けて行つた。彼女はキリリンの大な聲を耳にして、また醉つぱらつて何か言つてるんだよと、一寸の間そんな事を思つたが、直ぐ、なアに誰もあの人を信ずる人は無いから好い、といふやうな事を考へて、安心した。彼女は乾小屋の處まで歩いて行つたが、急に暗く

なつたのに驚いて、橋の所まで、駈け戻つた。この瞬間、彼女は總ての男子が戀しくなつた。

刻々と迫つて來る闇黑の中に、樹は山に融けて消え、馬は馬車から見別が附かなくなつて了つた。唯旅亭の窓から小な燈が洩れて見える。彼女は石や叢の間を蛇のやうに紆曲してをる路を横切つて、山へ登ると、一つの石に腰を掛けた。

下には焚火が燃えてをる。助祭が袖を捲げて、火の近くを立廻つてゐるのが好く見える、彼の細長い影は、焚火を圓の中心にして、半徑を描いてをる。彼は焚木を弄りながら、長い棒の先に縛りつけた匙で鍋を攪き廻してゐる。

サモイレンコオは、銅のやうな赤い顏をして、自分の家の臺所にゐる時と同じ樣に、何か大な聲で喧しく言ひながら、火の周圍を奔走してゐる。

『諸君、鹿は何處にあるんだ。忘れて來たに違ひないぞ。何だつて僕がこんなに働いてるのに君達は殿樣然と默つて座つてばかりゐるんだ。』

ラアエウスキイとニコヂンとは、根こぎにされた樹に、列んで腰を掛けて、物思はしげに火を眺めてゐた。マリア・コンスタンチノウナとカチャとコスチャは、籃の中から茶道具を取出してゐた。フオン・コオレンは、胸の處に腕を組んで、片足を石に載せて、水に近い岸の上に一人立つて、物思ひに沈んでゐた。

焚火からはパチ〳〵と火の子が飛ぶ、影は眞黑な人の姿に引添うて、地面の上を彼方此方と飛移り、慄へながら山を越え、樹を越え、橋を越え、乾小屋を越えて廣がつた。向岸に燈が點いた、その光が河に映つた、矢を射るやうに流れる水は、光の影を片々に裂いた。

助祭は、ケルバライが庖丁を入れて、綺麗に洗つて置いた筈の魚を取りに出

掛けた。彼は途中で立止つて、周圍を眺めた。

『まア何といふ好い景色だ。』と、彼は心の内で然う思ふ。『人間と、石と、火と、黄昏と、不恰好な一本の樹と――その外には何も無いのだ、しかも何といふ好い景色だ。』

河の向岸の乾小屋の側に、幾人か見馴れぬ人が現れた。火が閃々するのと煙とでどういふ人達だか好くは分らぬ。が、時々、毛のむしやくしやした帽子だの、灰色をした髯だの、青い襯衣だの、肩から垂らした襤褸だの、帶に束ねた匕首だの、木炭で書いたやうな黒い眉毛をした煤びた長い顏だのが見えた。何でも十人位の人數に違ひない、何故と言へば五人地面に座つてゐるのがゐて、外に五人乾小屋の中へ這入つてゐたのがあつたから。入口の處に、焚火に背中を向けて一人立つてゐる。話をしてゐるのがよく聞える。サモイレンコオが

枯枝を足したので、火がぱッと明るくなると、戸の中から外を覗いてゐる顏が二つ見えた――誰かゞ話してる物語を、さも面白さうに聽いてゐるといふ顏つきだつた。暫く經つと、靜かな、調子の好い歌が、柔な聲で聞えて來た、恰ど讃美歌を聽くやうである……助祭はこれを聽くと、偶と自分の十年後を考へ出した、自分がエクスペヂションから歸つた時の事を考へ出した。彼は必と本當の傳道僧になつてゐるだらう、立派な經歷を持つた有名な著述家になつてゐるだらう。彼は僧院長と崇められるに至るであらう、それから――僧正になるだらう。彼は黄金の僧冠を戴いて、中央寺院の彌撒を營むであらう。彼は、耶蘇の像を胸に飾つて、二つか三つ手の出てゐる燭臺を捧げて、祭壇に進んで、そして、人民に祝福を與へてゐる自分の姿を見た。

《おゝ天に在す主よ、吾等を護り給へ。願はくはこの葡萄畑を屢訪ひ見給へ、

願はくは、貴方の正しき御手を以て、この畑に植ゑさせ給へ。》と、自分が言つてをる。子供達は天使のやうな聲を上げてこれに和す。《主は聖なるかな……》

『助祭君、魚は何處に在るんだ。』

サモイレンコオの聲は、助祭君の幻想を破つた。

助祭は火の方へ戻つて來る道すがら、或暑い七月の眞昼に、塵埃深い道を遣つて來る行列勤行を心に描いた。先づ第一に百姓達が旗を持つて遣つて來る、それから女や娘達が偶像を捧げて來る。その後から子供の合唱隊と、頭に布を卷いて髪の毛に藥を挿した役僧とが遣つて來る。それから順に、彼自身即ち助祭が、後に坊主を從へて、十字架を捧げて遣つて來る。それから、百姓や女や子供の群衆雜沓、その群衆の中に、その坊主の妻君と、それから、頭に布を被つた自分の妻君とが見える……

合唱隊が唄ふ、子供達が叫ぶ、鶏が鳴く、天鵞がけたゝましく唄ふ……

行列は今歩を止めて、通り過ぎる會衆に聖い水を撒きかけた……段々と彼等は進んで行く、跪きながら、雨乞をしながら。それから食事をする、話をする……

《これも亦美しい。》と、助祭は考へた。

（十八）

キリリンとアフミアノフとは間道を通つて山へ登つた。アフミアノフが少し遅れてゐると、その間にキリリンはナデエダの側へ寄つた。

『今晩は……』と、彼は軍隊の敬禮をしながら言つた。

『今晩は。』

『然うだ……』と、キリリンは空を眺めて考へながら言ふ。『然うだ。』

立派な外套や氣取り切つた威嚴にも關らず、彼は少からず狼狽してをる。

『何です……然うだッて。』と、ナデエダは、アフミアノフが此方二人を視てゐるのに眼を留めながら言つた。

『どうも然うらしい。』と、士官は緩り言つた。『吾々の戀は未だ花の咲かない內

に凋んで了つたのですね。どう解釋したら好いんでせう。コケットリイですかな、婦人の外交手腕ですかな、それとも又……』

コケットリイ『それは間違です。どうぞ彼方へ入らして下さい。』と、突慳貪に言つて、ナデエダは彼の顏を胸惡げに眺めた、さうして、如何してこんな人にこんな事を言はれるやうにしたものだらうと、自分で自分を訝つた。

『ほお。』と、彼は暫く默つて立つてゐたが、やがて又口を開いて、『宜しい、まア御機嫌の直るまで待ちませう、御機嫌が直れば、そんなに恐い顏もなさるまい……然うやつて入らつしやれば、まア段々に直りませう……然やうなら。』

彼は帽子の處へ手を擧げた。そして叢を分け分け、何處かへ行つて了つた。

暫くすると、今度はアフミアノフがおづ〳〵と彼女の側へ寄つて來た。

『美しい晩ですなア。』と、彼は言つた、アルメニアの訛が少し有る。

coquet (co-ket') adj.
coquetry (co'-ketry) n.

彼は見てくれの好い青年である、着附も意氣な趣味である。併し、ナデエダはこの男の親父に三百ルウブル借があるので、何となくこの男を見ると怨めしくなる。おまけに彼女は、今夜この《吾々のサアクルでない》男が、野遊會に招かれてゐたのを、少からず不快に思つてゐるのだ。

『今日の野遊會は成功でしたな、然うぢやないですか。』と、暫く默つてゐた後て、彼は斯う言つた。

『然やうです。』と、彼女は同じた。さうして、偶と借金の事を思ひ出したといふ風に、疎忽にも斯う言つた、『どうぞ御店へお歸りなさいましたら、然う被仰つて下さいまし、一兩日内にはラアエウスキイが三百……でしたか、お幾らでしたか、精確した高は覺えてをりませんが……必とお拂ひに上りますですからッて。』

『貴方が私の顏を見る度にそれを被仰つて下さらなけりやア、もう三百差上げても宜しいんです。何故貴方は然う散文的なのです。』

『へえ。貴方は詩がお好きて入らつしやいますの。』

『詩が好きでなければ、こんな、貴方の入らつしやる所へなぞ參りはせんです。』

ナデエダは思はず吹出した。と、或妙な考が彼女の心中に閃いた。これを實行さへすれば、借金も總て濟しにする事が出來ると思つた。彼女は散々彼を引張り廻して、その揚句に捨てゝ了ひたいやうな氣がした。

『私は失禮ながら貴方に少々御忠告申し上げたい事があるのです……』と、アフミアノフは恐る〳〵言ひ出した。『私はキリリンに敵對して貴方の保護者となりたいのです。あの男は貴方の事に就いて實に怪しからん噂をして歩いてをります。』

『馬鹿が何を言つて歩かうと、私は少しも排ひません。』と、ナデエダは冷かに言つた。この青年を弄ばうとした一時の考も、急に何處へか行つて了つた。

『もう降りませう……』と、女は語を續けて、『必と探してゐるてせうよ。』

何れも魚のスウプは旨いと言つた。みんなは互に酒の杯を打合せた、この騒ぎに、ナデエダもキリリンの事はすッかり忘れて了つた。

『喜ばしい野遊會だ、好い晩だ。』と、醉機嫌のラアエウスキイが言ふ。『けれども、僕はこれらの總てにも增して、冬を取るね。霜の細末は彼が海狸皮の襟に燦爛たり。』か。』

『それは趣味の問題だ。』と、フォン・コオレンが口を出す。

ラアエウスキイは氣持が惡くなつて來た。彼の後からは火の熱が來る、前にはフォン・コオレンの憎惡がある。教育のある、頭の進んだ人間に卑まれる事

は、少からず彼の心を傷つけた、殊にフォン・コオレンの態度に幾分の根據有つて存する事は、彼自身と雖も認めない譯には行かなかつたので、猶と堪へられなかつた。そこで、わざと宥和的な態度を執つて、斯う言つた——

『僕は自然を熱愛する。僕は自分の博物學者でないのを悲む。僕は君が羨しい。』

『私には分りませんわ。』と、ナデエダは口を開いた。『人間自身が苦しんでゐるのに、何故人間が甲蟲の事で氣を揉まなきやならないんだか、それが分りませんわ。』

ラアエウスキイは女に同意した。併しながら、又女の言語に不誠實な所のあるのを見附けたといふ風で、斯う答へた。『甲蟲ぢやない。科學だ。』

(七)

十一時少し前に、馬車は歸りの用意をした。

ナデエダとアフミアノフとを除いて、總ての者はもう馬車に乘つて了つた。

然るにこの二人は、大層な上機嫌で、大聲に笑ひながら、追ひ駈けッくらをしてゐる。

『さ、諸君、急ぎませうぜ。』と、サモイレンコオは叫る。

『女に酒を飲ませるんぢやなかつた。』と、物徐にフオン・コオレンは言ふ。

ラアエウスキイは、疲れて氣を惱みつゝ、ナデエダを呼びに行つた。

ナデエダは、男が自分の方へ來るのを見ると、身輕に走り寄つて、その頭を男の胸に靠せかけた。

男は身を離して、突慳貪に、『さ、確りしなくちやいかんぢやないか。』

女は男の怒つた顏に憎惡を讀みとつた、そして氣が沈んだ。女は自分が餘りに奔放な振舞をした事に直ぐと氣が附いた。と、女の心は憂愁の氣に蔽はれて來た、一部は酒からである、そして一部は精神狀態からである。彼女は自分の前へ來た第一の馬車に乘つた。アフミアノフも亦これに乘つた。

ラアエウスキイはキリリンと同車した。動物學者はサモイレンコオと一緒に乘つた、そして助祭は婦人達と一緒に。

『どうだ、猿共の言ふ事を聞いたかい……』と、フオン・コオレンは眼を塞いで外套に身を包めながら口を開いた。『聞いたかい、彼等の言ふ事を。彼女は人間が苦しんでゐるのに、甲蟲の世話は燒きたくないと言ふ。猿共が科學者を批判する形式はいつてもこれだ。これらの動物に自由を與へて見給へ、きつと彼等

は自分達の全く知らない事に就いて、或は罵り、或は情に激し、或は批評するだらう。彼等は君と握手して、君の爲た事業に就いて君に感謝しようなどゝは、夢にも思つた事がないんだ。』

『何をそんなに激してゐるんだ。』と、欠伸をしながら、サモイレンコオは訊ねる。

『あの悶むべき婦人は、單に何か利口さうな事が言ひたかつたんだ、然るに君は今、それから在りと在らゆる結論を抽き出してをる。君は一體あの男に就いて怒つてゐたんだ、處が今度はあの男の爲に、あの女に就いてまで怒つて了つた。あれでも、あの女は立派な婦人だよ。』

『もう澤山、澤山……あの女は普通の女さ、たゞ腐敗してゐるだけだ、下劣なだけだ。アレクサンデル君、君にして若し亭主を捨てゝ戯け廻つてる唯の女に

出逢つたなら、《家へ歸つてお働きなさい。》と、必と君は然う言ふだらう。何故君はこの問題に就いては、例の勇氣を出して呉れないのだ。』

『僕は彼女に何の關係がある。』と、サモイレンコオは怒つて言ふ。『君は僕に彼女を打てと言ふのか。』

『いや單に害毒を助長し給ふなと言ふのだ。僕は科學者だ、君は醫者だ。社會は吾人を信じてをる。ナデエダ・イワノウナの如き婦人の存在に依つて起るべき危險を社會に指摘して遣るのは吾人の義務だ。』

『フエドロウナだよ。』と、サモイレンコオは誤を正した。『さうして社會は如何すれば好いのだ。』

『それは社會の手腕に在るさ。僕の意見に依ると、最も強い最も確な手段は暴力だ、先づ彼女を亭主の許へ軍隊の手で送らせるんだ、若し亭主が彼女を受取

らなかつたら、懲役に遣るか、然もなくば懲治院へ送るんだ。』

『ふう。』と、サモイレンコオは溜息をついた。彼は一寸の間默つてゐたが、やがて物徐に斯う言ふ。『二三日前に君はラアエウスキイの如き人間は絶して了はなければいかんと言つたね……若し……政府なり社會なりが、君に彼を滅せと委任したら、君は實際遣る積りか。』

『ああ、僕の腕は決して慄へないね。』

（八）

ラアエウスキイとナデエダは、自分の家の、暗い、狹い、陰氣な部屋へ這入つた。二人とも默つてゐる。ラアエウスキイは蠟燭を點けた。ナデエダは帽子も外套も脱らずに腰を卸して、悲しげにおど〳〵した眼を上げて、ラアエウスキイを見た。

彼は彼女が説明を求めてゐるのだといふ事を知つてゐる。併しそれを與へるのは面倒でもあり且無益でもある。尤も野遊會の會場に於ける自分の荒い爲打に就いては、彼自らも密に悔んでゐるのだ。

彼は偶と上着の衣兜に手を突込んだ、すると手紙が手に觸つた、ナデエダの亭主の死を知らせて來た手紙だ。彼はもうそれを見せて了はうと思つた。

『愈〻問題を一掃すべき時が來た。』と、彼は考へる。『儘よ、見せて了へ。』

彼は手紙を引張り出して、それを女に渡した。

『それをお讀み。』と、彼は言ふ。『御前に關係した事だ。』

手紙と女を殘して、彼は自分の書齋へ引込んだ、そして長椅子の上へ横になつた。

ナデエダは手紙に眼を通した、讀み終ると、天井が落ちて來るやうな氣がした、壁が四方から押寄せて來るやうな氣がした。

總ての物が、俄に狹く、暗く、恐ろしくなつた。彼女は忙てゝ三度十字を切つた、そして聞えるか聞えないか位の聲で念じた。『神よ、彼の靈魂を休はせ給へ……神よ、彼の靈魂を休はせ給へ……』

それから泣き出した。

『ワンヤ。』と、女は呼んだ。『イワン・アンドレキッチさん。』

返事が無い。然れども、呼に應じて、ラアエウスキイは必と歸つて來て呉れた事と信じて、彼女は子供の樣に獻欷をし始めた。

『何故あの人が死んだなら死んだで早く然言つて下さらなかつたの。私それを知つてれば、野遊會なんぞへ行くんぢやなかつた。私あんなに騷ぐんぢやなかつた……男の方つたら、皆私に亂暴な事を被仰るんですもの……ああ罪だわ、罪だわ。私を救つて、ワンヤ、どうぞ私を救つて……私もう死にさうだわ……私もう……』

ラアエウスキイは女の獻欷を耳にした。彼は恐ろしい壓抑を感じた、彼の心臟は激烈に鼓動した、彼は悲しさうに起上つて、女の部屋へ這入つて來ると、暫く默つて立つてゐたが、やがて暗闇の内に臂掛椅子を探り當てゝ、これに腰

を卸した。

『この家は牢獄だ……』と、彼は思つた。

『どうしても、もう逃げなけりやならん……もう如何しても……』

骨牌をしに行くにはもう時間が遲かつた、町の料理屋で起きてる家はもう一軒も無かつた。彼は又横に倒れて、指を耳の穴に突込んで、女の獻歌を聞くまいとした。やがてサモイレンコオの處へ行かうと決心した。

ナデエダの前を通つて又ナデエダの氣を擬すでもないと、窓から庭へ飛降りて、塀を乘越えて往來へ出た。眞暗だ。

汽船が一艘恰ど今着いた所だ、燈に依つて判斷すると、大な旅客船だ。繰出される錨鎖の音がよく聞える。小な赤い燈が海岸から汽船の方へ向つて動いて行く、それは稅關の端艇だつた。

『船客はみんなキャビンで好く寐てゐるわい……』ラアエウスキイは彼等の安眠を羨んで斯う思つた。

サモイレンコオの家の窓は開いてゐた。

ラアエウスキイは覗き込んで見た、眞暗だ、そして靜だ。

『アレクサンデル君、もう寐て了つたか。』と、彼は壁を掛ける。『おい、アレクサンデル君。』

『誰だ。如何したんだ……』

『僕――ラアエウスキイ。』

直と戸が開いた。柔なランプの光がぱッと差すと、柄の大なサモイレンコオが、眞白な着物を着て、寢帽子を頭に載せた儘で出て來た。

『何か急用でも出來たのか。』と、彼はまだすッかり眼が覺め切れないので、深

い息をしながら、眼を擦り擦り訊ねる。『待ち給へ、今表を開けるから。』

『いや、打捨つといて呉れ給へ、僕は窓から飛込むから……』

ラアエウスキイは、窓を登つて中へ這入ると、行きなりサモイレンコオの手を掴んだ。

『アレクサンデル君。』と、彼は震へ聲で泣くやうに言つた。『どうか僕を救つて呉れ給へ、僕は君に懇願する、僕は君に哀願する。この境遇には僕もう一刻も堪へられない。これがこの上少しでも續いたら、僕は首を縊つて了ふ。』

『待ち給へ……君は何の話をしてゐるのだ。』

『まア蠟燭を點けて呉れ給へ。』

『おお、おお。』と、吐息をつきながらサモイレンコオは蠟燭を點けた。『慌いた……二時だぜ。』

『勘忍して呉れ給へ、僕は自分の家にをるに堪へんのだから。』と、ラアエウスキイは言ふ、サモイレンコオが前にゐるのと、燈が前にあるので、稍氣が落着いて來た。『君、アレクサンデル君、君は僕の第一の、僕の唯一の友達だ……僕の總ての希望は君に在る。君の意志の有ると無しとに關らず、どうしても君は僕を救つて呉れる義務を持つてる。僕はどうしてもこの土地を去らなければならないんだ。金を貸して呉れ給へ。』

『ああ驚いた……』と、サモイレンコオは身體を掻きながら、吐息をついて、『僕は恰ど今寐ついたばかりの處を汽船の笛で起されて了つたんだ、すると君が遣つて來たんだ……一體どの位入るんだ。』

『少くとも三百ルウブルは入るね。あれにも百ルウブル位は置いて行かなきやならないし、あとの二百ルウブルは僕の旅費にたッぷり入るからね……君には

既にもう四百ルウブルから借がある、然れどもそれは皆必と送つて寄越すよ……みんな……』

サモイレンコオは、兩方の頰髭を片手で掴んで、脚を廣げて、何か考へ出した。

『然う……』と、彼は躊躇して口籠つた。『三百……は一寸手許に無いが……誰かから借りて上げよう。』

『ては、お願だ、借て呉れ給へ。』サモイレンコオの顏に、自分の爲に盡す色のあるのを見て取つて、ラアエウスキイは斯う言つた。『どうか借りて呉れ給へ、僕必と君に返すから。ビイタアスバアグへ着き次第、直ぐ君の處まで送らう。それは少しも心配ないよ。サッシャ。』と、彼は稍氣も晴やかになつて、『酒を一杯御馳走になりたいね。』

『お安い事だ……』

二人は食堂へ這入つた。

『そしてナデエダは如何なるんだ。』と、サモイレンコオは、葡萄酒を三本に桃、を一皿、食卓の上に出しながら訊ねる。『あの人はこの土地に一人殘して置く譯か。』

『いや僕は、總てを解決する、總てを……』と、ラアエウスキイは思ひがけぬ嬉しさに胸を溢れさせて、『後から金を送るのさ、それから僕の處へ來るといふ譯さ……そして二人は和解するといふ順序さ……親友、君の健康を祝す。』

『待ち給へ。』と、サモイレンコオは言ふ。

『先づ初にこれを飲んで呉れ給へ……これは僕の葡萄園で出來たんだ。この瓶はナワリッゼの葡萄園から來たんだ、それから、これはアクハッロフの葡萄園

から來たんだ……三本を飲み競べて見て、そして君の批評を聞かして呉れ給へ……僕の所のは少し酸味があると思ふが……如何だらう。』

『然う。御蔭で助かつた、アレクサンデル君……有難う……僕は新しい人間になつたやうな氣がする。』

『少し酸味があるだらう。』

『いや、僕には分らない。併し君は愛すべき人だ、異常な人だ。』

その青白い、興奮した、親切らしい顔を眺めて、サモイレンコオは、フオン・コオレンが斯くの如き人間は滅盡して了ふが好いと言つた語を思ひ出した、そして、彼にはラアエウスキイが、誰にでも自由になる、弱い、味方の無い子供のやうに見えた。

『ピイタアスバアグへ行つたら、阿母さんと和睦するんだらうね、然うぢやないか。』と、サモイレンコオは言ふ。『あれは宜しくない事だ。』

『宜しい、宜しい。大丈夫遣る。』

二人は暫く語が絶えた。

最初の一本を空にして了ふと、サモイレンコオは言つた——

『フオン・コオレンとも和睦しなけりやいかんね。君達二人は人間の内でも最も立派な人間ぢやないか、最も才學に秀でた人間ぢやないか、然るにその立派な人間二人が、狼のやうに睨み合つてるといふのは可笑しい。』

『そりや全くだ、彼は人間の内でも最も立派な人間だ、最も才學に秀でた人間だ。』と、ラアエウスキイは同意した、彼は今總ての人を讃めたくなつた、總ての人を許したくなつた、『彼は非凡な人間だ、然れども彼と歩調を一つにして行く事はどうしても僕に出來んのだ。彼と僕とは餘りに性格が違つてをる。僕は

弱い、人に附く質だ――恐らく弱な時には、彼の爲に僕の手を貸さうとする時さへあるだらうと思ふ、然れども彼は侮蔑を以て僕の手を斥けるだらう。』

ラアエウスキイは葡萄酒をちびり〳〵飲んだ、部屋を彼方へ此方へと歩いた、そして急に立止つた。

『僕はフオン・コオレンを好く知つてをる。彼は確りした、强い、專制的な性質だ。彼が始終エクスペヂション、エクスペヂションと口癖の樣に言つてるのを君は聞いてるだらう――あれは決して空な語ぢやないんだ。彼は實際沙漠を要する人なんだ。月光の夜を要する人なんだ。廣い天空を要する人なんだ、腹の減つた、病氣になつた、疲れた案内者や人夫共が、彼の周圍に眠り倒れてゐる時でも、彼は唯一人、スタンレエのやうに、眼を覺まして、椅子に腰掛けて居て、自分が沙漠の王にでもなつたやうに感ずる人なんだ。この世界の主人にでもなつたやうに感ずる人なんだ。彼は常にどん〳〵どん〳〵どん〳〵進んでゐるんだ。彼の部下は一人又一人と呻いて斃れる。然れども彼はどん〳〵突進んで行くんだ。終には彼自身も亦死んで了ふのだらう、然も尙彼は、君主として、王として、永へに殘るのだらう、彼の墓の上の十字架は、三十哩四十哩の遠くから隊商の眼につくのだらう、而して荒漠たる平野を一人で支配するのだらう。僕はこの樣な人が何故軍人にならなかつたかと非常に殘念に思ふ。彼は必ず立派な將軍になり得る人なんだ。彼は自分の騎兵を川へ叩つ込んで、死骸の橋を作る人なんだ：　ああ僕は實に、實に、好く彼を知つてをる。彼は何の爲にこんな所で金を使ふ必要があるのだ。こんな所で彼は抑も何を求めようとしてゐるのだ。』

『海の地方動物を研究してるのだ。』

『いや、その事なら僕の方が好く知つてゐる。』と、ラアエウスキイは吐息をついて言つた。『僕が汽船の中で會つた或學問の有る紳士は、僕に斯ういふ事を言つた、黑海には極めて地方動物が少い、それは硫化水素が過多な爲に、海底で有機的の生活をする事が出來ないからださうだ。總ての動物學者はネエプルスかポラ・フランカの生物學地で研究をしてをる。然るにフオン・コオレシは、孤獨だ、頑强だ。彼は誰も黑海で研究する者が無いから、それで自分一人で研究してるのだ。彼が大學の爲事を打捨つて了つたのも、同窓と一緒に何かするのが厭だからだ。彼は先づ第一に專制君主なんだ、それから第二に動物學者なんだ。僕の語を記憶して置き給へ、彼は遠からず一大事業を成し遂げるに相違ない。彼はエクスペヂションから歸つたら、大學に一大改革を起さうと夢想してゐるんだ。專制君主の氣性は、戰爭に於ける場合も、科學に於ける場合も、等

しく强い。彼がこの小な汚い臭い町に二夏を送つたのも、都に於いて第二人者たらんよりは、寧ろ村に於いて第一人者たらんとしたからだ。この土地にゐれば、彼は王だ、驚だ。總ての住民が一度に彼に吠え掛らうとも、彼にはそれらを威服するだけの力があるんだ。彼は總ての事を自分の一身に背負つて立て、その上他人の事に干渉するんだ。然るに僕は彼の前足を避けてをる、彼はそれを知つてゐるんだ、だから僕が嫌なんだ。僕のやうな人間は滅して了ふか、工場へでも送つて了つた方が好いと、君に言ひはしなかつたか。』

『言つたよ。』と、サモイレンコオは笑ひながら頷いた。

ラアエウスキイも續いて笑つた、そして又葡萄酒を飲んだ。

『彼は理想に於いても專制君主だ。』と、彼は桃を一つ取りながら言ふ。『公衆の利益の爲に働く普通の人間なら、自分の隣人の事を思ふのが先づ當前だ。然る

にフォン・コオレンにとつては、人間は犬だ、人生に於ける彼の目的と交渉があるには、餘りに些細なものだ。彼は永遠に働いてゐる人だ、縱ひ隣人に對する愛が無くとも、このエクスペヂションを續けてゐる人だ、それが爲に身命を危くしても敢て顧みない人だ。彼は無形の目的の爲にそれを爲るのだ、理想の爲にそれを爲るのだ。彼の理想は一般の人類だ……特殊な個々の人間は、悉く自分の奴隷と心得てゐるんだ、荷を負ふ駝獸と心得てゐるんだ、殺戮の材料と心得てゐるんだ。彼等を滅すも好い、彼等を懲役に遣るも好い、彼等を銃殺するも好い……人類全體を好くしようといふ誠實な望を持つて遣る事なら、何をしても好いといふのだ……しかもその人類といふのは何だ。一の幻影に過ぎないものぢやないか、一の歴氣樓に過ぎないものぢやないか……專制君主は常に夢想家だ。君、僕は彼をこの位好く知つてをる。僕は決して彼の重要な人

物たるを否認するのぢやない、世界は常に斯かる人物に依つて保たれて行くのだ、世界が若し僕等の如き弱い人間に支配されたら、僕等の親切氣と好意とは、必ずこの世界に汚點をつけて了ふだらう、恰ど壁の繪に蠅が汚點をつけるやうに。』

ラアエウスキイはサモイレンコオの直ぐ側に腰を掛けた。そして誠實な感動を以て斯う言つた、

『僕は、空虛な、價値の無い、失敗した人間だ。僕が呼吸するこの空氣、この酒、戀愛……一言にして言へば、總ての僕のライフ、これを僕は虛僞だの安逸だの卑怯だのといふ高い錢を出して買つたのだ。僕は自分を欺いてゐたやうに、人をも欺いてゐた。僕は苦しんだ、併しながら僕の苦痛は安價な下等な苦痛だ。僕はフォン・コオレンの敵意の前に恐懼して頭を下げるね、それは僕が自分を

悩むからだ、自分を賤しむからだ。』

彼は立上つて、激昂しながら部屋を歩き廻つた。

『僕は自分の缺點を明に知り且認め得た事を喜ぶ。それは僕を新しい努力に振ひ立たして呉れたからだ。君は僕が如何に熱し、如何に渇して、自分の復活を望んでをるかを知つてはゐまい。僕は誓ふ、僕は必ず男になる。必ず成る。酒の勢か、實際の感情か、それは知らぬが、僕は今夜君と共に過したやうな、こんな明るい清い時を過した事は、未だ嘗て無かつた。』

『もう君寢る時分だよ……え、君。』と、サモイレンコオは言ふ。

『然う、然う……失敬した……今直ぐ。』

ラアエウスキイは忙てゝ帽子を探し出した。

『感謝する……』と、吐息をつきながら口籠つて、『實に感謝する……親切と優しい言葉とは慈善以上だ。君は僕に新生涯を吹込んで呉れた。』

彼は帽子を見つけると、突立つて、恐る〳〵サモイレンコオの顔を見た。

『アレクサンデル・ダビドヰッチ君。』と、彼は哀願するやうな聲で言つた。

『何だ。』

『今夜君の所へ泊めて呉れないか。』

……何故悪い。』

斯くてラアエウスキイは長椅子の上へ横になつた。

(九)

野遊會のあつた日から三日計り經つと、マリア・コンスタンチノウナが不意とナデエダの處へ遣つて來た。

そして挨拶もせずに、行きなり彼女の兩手を掴んで、自分の胸へ押つけた。

『ねえ貴方。』と、彼女は深く感動してゐる樣子で、『私胸がどき〳〵してをりますの。あの可愛い親切な軍醫さんね、あの方が昨日宅のニコヂンの處へ入らして被仰るには、貴方の旦那樣がお歿りなすつたッて。然うなんですの、ねえ貴方、然うなんでございますの、本當なんでございますの。』

『えゝ本當です……宿は歿りました。』と、ナデエダは答へた。

『大變ですわねえ、大變ですわねえ、ねえ貴方。然れども惡い事の中には、必

と又好い事がございますわ。貴方の旦那樣は必と好い方で入らしたんですわね、好い方はこの現世より天國に澤山御用がありなさるんですわ。』

マリアの顏の筋が震へ出したかと思ふと、彼女は《巴旦杏微笑》といふのをやつて、『けれども、これで貴方も自由の身體になりなすつたといふもんですわ、ねえ貴方。』と、息を切つて熱心に言ふ。『もうこれからは威張つて、頭を持上げて、大つぴらに世間の人達の顏を見て歩く事が出來ますわね。神樣も、世間の人も、今では貴方とラアエウスキイさんとが御一緒になりなさるのを待つてゐるばかりですわ。好い事ねえ。私嬉しくつて、胸がどき〳〵して、何も言へませんの……私貴方の御媒人を致しませう、ねえ貴方……ニコヂンも私も本當に貴方を愛してゐるんですよ、ですからどうか私共に御法通りの純潔な式をさせて下さいましな。何時、式は何時になすつて。』

『そんな事なら私少しも考へてをりませんの。』と、ナデエダはマリアの手を放して言ふ。

『いんえ、貴方、考へて入らつしやらないと筈はございませんわ。』

『でも本當に考へてゐないんですもの。』と、ナデエダは笑つた。『何故私共は結婚しなけりやならないんでせう。私少しもその必要を認めませんわ。今まで通りに遣つて參れば、それで少しも差支はないと思つてゐますの。』

『何でございますつて。』マリアは恐怖して絶叫した。『まあ、貴方は何を被仰るのです。』

『結婚をして何の好い結果が得られませう。却て惡くなるばかりですわ……私共の自由といふものが無くなつて了ふ譯ですもの。』

『何を被仰るんです、貴方は。』と、マリアは後退りをしながら手と手を握り合

せて絶叫する。『まあ氣をお落ちつけ遊ばせ。貴方は激して入らつしやる。』

『何故氣を落ちつけるのでございますの。私は今までにまだ一度も眞の人生といふものを味つた事はございませんわ。』

ナデエダは考へた、實際自分は今までに、一度も自分の生活といふものを味つた事はなかつた。高等女學校を卒業すると、自分の好かない男と結婚した。それから、ラアエウスキイと懇になつた、そしてこの陰氣な物寂しい海邊に彼と一緒に居通して、始終何かを望んでをる、望んでをる。これが果して人生といふものだらうか。

『結婚するのが本當かも知れないねえ……』と、彼女は獨語を言つた、併しながら偶とキリリンとアフミアノフとの事を考へ出して、赤くなつた。『いんえ、駄目だわ。ラアエウスキイが跪いて賴んでも、拒絶しなけりやならない。』

マリアは、悲しさうな眞面目な顏をして、空を見詰めながら、長椅子に座つてゐたが、やがて立上ると、

『貴方、然やうなら……』と、冷に言つた。

『御心配をかけて濟みませんでした……誠に申上げ難い事でございますけど、只今限り私貴方と御交際を絶たなさやなりませんわ。ラアエウスキイさんは、私何處までも御尊敬申上げます、然れども貴方を宅へ御入れする事はもう決して出來ません。』

彼女は自分の調子の眞面目なのに壓さるゝものゝやうに、嚴肅に斯う言つた。が、彼女の顏は又震へた。そして物優しい同情のある顏附をした。彼女は吃驚した女に兩手を伸ばして、哀願するやうに言つた。

『ねえ貴方、ねえ貴方、私貴方の阿母さんになりませう、でなければ姉さんになりませう……少しの間ね。』

ナデエダは自ら憫むの情に心臟の戰くを覺えた。自分の本當の母が生返つて來て、自分の前に立つたやうな氣がした。彼女は激しくマリアを抱締めて、頭をその肩に擦りつけた。二人は聲を上げて泣き出した。

それから二人で長椅子へ腰を卸して、また暫くの間 歔欷をしてゐた、互に顏を見ないで、一言も口が利けないで。

『ねえ貴方、可愛い方。』と、マリアは漸く口を切つた。『私もう容赦なしに、飾の無い本當の事を申上げて了ひませう。』

『どうぞ、どうぞ。』

『斯うなんでございますよ、貴方。この町で貴方を接待する女は、私唯一人だといふ事は、貴方御存じで入らつしやるでせう。貴方が入らしつたその日か

ら、私貴方には吃驚してをりますの。然れども外の方のやうに貴方を卑む事は如何しても私に出來ませんでした。私ラアエウスキイさんの爲に悲みましたわ、息子の……阿母さんの無い、無經驗な、弱い、外國へ來てゐる青年の……爲にでも悲むやうに、私悲しみました、悲しみましたわ……宿は私共が貴方と御交際する事に反對でございました……然れども私宿に說きましたのよ、そして到頭負かしましたのよ……それから、初めて、私共はラエアウスキイさんを內へお入れ申したんでございます、勿論それと一緒に貴方もね。でございませんと、ラアエウスキイさんは侮辱されたとお思ひでせうと存じましてね。私にはそら娘が一人ございませう、息子が一人ございませう……まだ優しい、子供らしい心でございますわ、純潔な心でございますわ、ねえ……貴方を宅へお入れはしたものゝ、全く子供の爲には慄へましてございますのよ……そりや貴方母に一

度なつて御覽なされば、この心配は直ぐお分りでございますわ……すると、私が貴方を內へお入れしたといつて、皆が驚いたんでございます……御免遊ばせ……皆が諷刺を申すんでございますよ……勿論、色んな噂を致しましたわ、それは御存じて入らつしやるわねえ……私も心の底では貴方を責めてをりました、然れども貴方は全く不幸な方でございます、てございますから全くお氣の毒になりますわ……』

『然れども何故てございませう、何故てございませう。』と、ナデエダは手足を慄はせながら詰め寄つた。『私は誰かに何か惡い事でも致しましたらうか。』

『そりや貴方は罪人てすわ。貴方は祭壇の前で貴方の旦那樣になすつた誓をお破りなさいました。貴方にさへ逢はなければ、生涯の妻を正式に貰ふ事の出來た立派な青年を、貴方は誘惑なさいました……貴方は男の青春をお破りなさい

ました。男が悪いんだなんて被仰つても、そりや私信じませんわ……男といふ者は元々家庭に不注意な者なんてございます、男といふ者は頭で生きてゐるもんてございます、心で生きてゐるもんぢやございません。男には分らない事が澤山にございます、女には何でも分ります……どんな事でも女を頼にしないものはございませんわ。色んな事が女には任されます、色んな事が女からは要求されます。ねえ貴方、女が本當に男より馬鹿で弱かつたら、何て神樣が育兒の大任を女にお任せなさいませう。だのに、ねえ貴方、貴方は遠慮といふものをお忘れなすつたんでございます。これが普通の女なら、貴方と同じ境遇にゐて御寛遊ばせ、閉籠つて内にばかり引込んでゐますわ。そして、主なる神の殿堂で禮拜をしてゐる人達は、黒い着物を着て、泣いてゐる、顔色の青ざめた女を想像して、心から言ふてございませうよ、《おお神よ、罪を犯した天の使は今貴

方の御許へ歸りつゝあります……》ッて。然れども、貴方は然うぢやございませんのね、貴方は大びらね、貴方は御自分の爲すつた事が御自慢のやうね。貴方は平氣で戯けたり笑つたりして入らつしやるのね、だから私貴方を見てゐると恐ろしくて慄へて來ますわ、貴方が宅へ入らつしやると、今にも天から雷が落ちて來て、私の内を潰して了やしないかと存じまして。いゝえ、貴方、何も被仰つちや厭、何にも被仰つちや厭。』

ナデエダが何か言はうとするのを見て、急いでマリアは語を續ける。

『私の言ふ事を信じて頂戴、私は決して貴方を欺さうなどゝは思ひません、私は貴方の御心にある眞理を少しでも隱さうなどゝは致しません、聽いて頂戴、ねえ貴方……神樣は在らゆる罪人に符號をお附け遊ばします、そして貴方にもお附け遊ばしました。貴方の御着物は眼に立ちます。』

自分の着物に就いて常に高尚な意見を抱いてゐるナデエダは、覺えず泣くのを止めて、吃驚した顏をしてマリアを見た。

『ほんとに眼に立ちます。』と、マリアは語を續ける。『世間はみんな貴方のお身なりで貴方の行を判斷してをりますわ。貴方の御姿を見ると、みんな冷笑した り肩を縮めたり致しますわ、その度に私貴方の爲に悲むんでございますよ。それに……御免遊ばせ……貴方は可哀さうに些ともラアエウスキイさんを見てお遣り遊ばさないのねえ。あの方の襟飾が眞直になつてゐた事は唯の一度もございません、必と御宅で打捨り放しにされて入らつしやるんですわね。あの方が時間とお給金を半分御茶屋で使つてお了ひなさるのに、些とも不思議はございません。まあ御宅は如何てございます……あの塵埃は、あの蠅の死骸は。貴方は卓を御掃除遊ばした事さへないんてせう。ねえ貴方、夫たる者が然ういふ事

を見なければならない道理はございません……苟も一家の妻たる者は清潔の天使にならなければなりません。私などを御覽遊ばせ、毎朝夜の明けない内に起きて、直ぐと冷い水で顏を洗ひます、そしてニコヂンに少しでも睡さうな顏を見せないやうにしてゐます……』

『然れども、そりやみんな無意味な事ですわ。』と言つて、ナデエダは又泣き出した。『私幸福でさへあれば……でも、私不幸なんですもの。』

『然う、然う、そりや貴方は全く不幸ですわね。』と、マリアは吐息をつくやうに言つた、思はず貰ひ涙を溢しながら。『そして將來には猶惡い事が待ち構へてをりますのね……寂しい老年、病氣、それから、恐ろしい審判の座の前の御勘定……おお、恐ろしい、恐ろしい。ところが今運命の神樣は、貴方に救の御手を貸して下すつたんですわね、てございますから、決してそれを拒ね退けてはい

けませんよ。御結婚遊ばせ、出來るだけ早く御結婚遊ばせ。』
『然うです、然うです、それが正當です。』と、ナデエダは言ふ。『然れどもそれは出來ません。』
『何故。』
『出來ません。それは貴方の御存じない事なんです。』
ナデエダは、キリリンに就いて、若いアフミアノフに就いて、借金の皆濟法に關して考へついた恐ろしい計畫に就いて、マリアに話がしたかつた。然れども、彼女はすッかり氣が滅入つて了つた。彼女は、今は甚しい羞恥の念に襲はれて、歔欷あげて泣き出した、もう一言も口を利く事さへ出來なくなつた。
『私はもう立ちませう。』と、彼女は口の内で言つた。『イワンは此處にをれば宜しうございます、私はもう立ちませう。』

『どちらへ。』
『露亞西へてございます。』
『でも貴方露亞西で如何してお暮らし遊ばすお積り。何も持たないで入らしつて。』
『飜譯でも何でも致しますわ、でなければ……私貸本屋を始めますわ……』
『馬鹿な事を被仰い、貴方。貸本屋をなさるにもお金は入りますよ。さア、もう私はお暇致しますから、氣を落ち着けて、私の申し上げた事を後で熟く考へて見て下さいまし。そして明日、宅へお出遊ばせな。お待ちしてをりますわ。では、然やうなら、私の可愛い天使さん。さ、キッスさせて頂戴。』
マリアは、ナデエダの額に接吻をして、十字を切ると、靜に部屋を出て行つた。

いつの間にかもう暗くなつてゐた。オルガは臺所にランプを點けた。

ナデエダはまだ泣きながら、寢室へ這入つて、横になつた。熱が出て來たやうだ、彼女は横になりながら着物を脱いだ、脱いだ着物を足の方へ投げつけた、そして毛布の下に身を屈めた。

『私が拂ひます。』とばかり、彼女は譫語の言ひ續けであつた。彼女は、自分が或病氣の婦人の側に座つてゐて、その婦人に自分の面影を認めてゐるやうな氣がした。

『私が拂ひます。お金の事なんか考へるのは馬鹿です、私……私、此處を立つて、ピイダアスパアグからあの人にお金を送ります。初に百ルウブル……それから又百ルウブル……そして、それから又、百ルウブル……』

ラアエウスキイは、その晩夜更けて歸つて來た。

『初に百ルウブル……』と、ナデエダは彼に向つて又繰返した。『それから又、百ルウブル……』

『御前は規尼涅を飲むと好い。』と言ひながら、彼は考へてゐる。『明日は水曜で船が出るけれども、俺はそれには乘れない。だから土曜日まで此處にゐなけりやならん。』

ナデエダは膝まで起上つて、『イル、トロワトオレ』の一節を口笛で鳴らし始めた、甚しく調子が外れてをる。顔を空ざまにして手を垂れた形は、墓石の上の童子か天使のやうに見える。

『また熱が出たんだね。』と、ラアエウスキイは女に向つて言ふ。

『何て被仰つて。』と、笑ひながら、燈を避けて眼を閉りながら、ナデエダが訊ねる。

『何てもないさ。明日の朝御醫者さんに來て貰はう。今夜はもうお寢。』
彼は枕を取つて、戸口の方へ行つた。
彼は愈〻女を捨てゝこの土地を去らうと堅く決心してから、ナデエダの顏を見ると、罪惡の念に交へて憐憫の情が起つて來るやうになつた。彼は、女の前にゐると、何だか自分が恥づかしいやうな氣がした。彼は戸口の處で立止つて、そして彼女を振返つて見た。
『野遊會の日は僕激してゐたから、何か亂暴な事を言つたかも知れない。勘忍して呉れ給へ。』
斯う言つて、彼は書齋へ引込むと、直ぐ横になつた、然れども、餘程暫くの間眠られなかつた。
明くる朝サモイレンコオは、祭日だといふので、正裝て遣つて來て、ナデエダの脈を見、舌を檢査した。彼が寢室から出ようとすると、敷居の處にラアエウスキイが立つてゐて、氣遣はしげに、心配な事は無いかねと訊ねた。
『安心し給へ、少しも危險な事はない。』と、サモイレンコオは言ふ。『なアに普通の熱さ。』
『ナデエダの事ではないよ。』と、ラアエウスキイは氣を苛立てゝ、眉を顰めながら言ふ。『金は出來たのか。』
『や、然うか、勘忍して呉れ給へ。』と、サモイレンコオはまごついて囁いた、戸口の方を見返りながら。『どうか勘忍して呉れ給へ。誰も明いてる金を一文も持つてゐないんだ。然れども僕は七處借り八處借りをして……漸くみんなで百十ルウブルだけ作へた。今日又誰かに頼む積りだ。少し待つてゐて呉れ給へ。』
『然れども土曜日がざり〳〵結着だぜ。』と、ラアエウスキイは氣を苛立てゝ、

身を慄はせながら囁く。『在らゆる聖徒に誓うて、土曜日より遅るゝ可からずだよ。土曜日に出發が出來なければ、僕はもう一文も入らない……一文も。醫者に金が無いといふのが、僕には不思議てならん。』

『然うとも、然うとも。』と、サモイレンコオは苦しさうに早口で囁く。『みんな僕の處から借りて行つて了つたんだ。もう七千ルウブルから出てゐるんだ、そして僕自身は借金だらけなんだ。これは果して僕の罪だらうか。』

『土曜日には必と持つて來ると言ひ給へ。』

『まア遣つて見よう。』

『僕は君に哀願する、ねえ君、金曜日の朝には必と僕の手に金が這入ると誓つて呉れ給へ。』

サモイレンコオは腰を掛けて、處方を書いて、そして歸つて行つた。

(十)

『捕縛にでも來たやうだね。』正裝のサモイレンコオが這入つて來た時に、フオン・コオレンは斯う言つた。

『いや恰ど御門を通つたから、動物學はどの位進んだか見たいと思つてね。』と言ひながら、サモイレンコオは動物學者の御手製に成つた大な白木の机の側に腰を卸した。

『如何した、聖父。』と、窓の側に座つて、何か寫し物に餘念のない助祭に向つて會釋をする。『僕は一寸此處に座らして貰つて、それから大急で、内へ行つて晝飯の仕度をしなくちやならん。いや、もう直だ……お邪魔か。』

『いんや決して。』と、動物學者は答へる、細い字で一杯何か書いてある紙を卓の

上に展げながら。『今筆記で忙しいのさ。』

『いや……それは、それは……』と、サモイレンコオは吐息をつくやうに言つて、徐に卓の上から埃だらけな一冊の本を取り上げた、その本の上には乾燥した昆蟲が一つ乗つてゐた。

『この小な緑の椿象が歩き廻つてゐて、突然君に捕へらるゝの運命に會するとするね。僕はその驚きを想像する事が出來る。』

『然う、そりや出來るだらう。』

『自然はこの蟲に何等か自衛の武器を與へてゐるかね。』

『無論さ。自ら守る爲に、そして他を襲ふ爲に。』

『然う、然う、然う……凡そ自然界に存在する物で、何かの役に立たないものは一つも無い、存在の理由を説明する事の出來ないものは一つも無い。』と、サ

モイレンコオは吐息をつく。『併しながら、茲に一つ僕に分らん事がある。君は才人だ、一つこれを説明して呉れ給へ。好いかい、茲に或獣がある、その獣は非常に美しい、しかも鼠より大くない。處が此奴非常に害をする。若し一羽の鳥がこの獣の眼に這入つたとするね。この獣は直にそれを捕へて、喰つて了ふんだ。それ計りではない、若しその鳥の巣の中に卵が在るのを見つけたとするね。この獣はもう空腹ではないのだよ、だのに彼はその卵を破して、足で以て蹴散らかすんだ。やがて今度は蛙に會ふ、と、これを玩弄物にして、死ぬまで責め惱ますんだ。それから自分の身體を舐め廻して、又出掛けるんだ……そして道にある物は何でも破して了ふんだ、何でも滅して了ふんだ……狐の穴を荒す、蟻塚を壞す、蝸牛を二つに嚙み裂く……鼠と闘ふ、鼬鼠や蛇を絞め殺す。この獣の全生涯は一の間斷なき虐殺の歴史だ。斯やうな動物の存在にも君は理由を見

出す事が出來るか。何が故に斯かる動物は造られたのか。』

『今君が話した通りの獸が特にゐるか、如何か、それは僕は知らん。』と、フオン・コオレンは答へる。『が併し、今の動物のするやうな事を爲てならんといふ法は無い。彼は鳥を捕へた、それは鳥が不注意だつたからだ。彼は卵を破した、それは鳥が巣を隠すのが拙かつたからだ。蛙は必とその皮膚の色に欠點が有つたに相違ない、然もなければ見つかる筈が無いんだ、以下總て同じさ。君のいつた獸は、唯弱い者、不熟練な者、不注意な者——一言にして言へば、身に欠點の有る者、即ち自然がその永存を適當と認めない者のみを殺すんだ。利口な者、強い者、注意深い者、發達した者は決して殺されやしないんだ。だから君のいふその動物は、その何者たるかは知らんが、萬物を完全にするといふ大目的の爲に盡してゐるのだ。』

『然うか、分つた、分つた。時に……』と、サモイレンコオは不意に言ひ出した。『金を百ルウブル貸して呉れないか。』

『好いとも。君等が害物だと思つてる小な動物の中には、研究して見ると、隨分面白い物がある。例へば鼹鼠だ。彼は有害な昆虫を根絶しにして呉れるから有用だといはれてをる。そこで斯ういふ話がある、或獨逸人がキルヘルム大帝に鼹鼠の皮で作つた外套を献上した、すると皇帝は斯やうな有用動物をこんなに澤山殺したのは不都合だと言つて、その男を御譴責になつたさうだ。しかも鼹鼠といふ動物は、今君のいつた獸に劣らぬ殘忍な奴なんだ。』

フオン・コオレンは金箱の錠を開けて、百ルウブルの札を出した。

『鼹鼠は蝙蝠と同じに強い胸骨を持つてをる。』と、彼は金箱に錠をかひながら語を續ける。『殊に骨骼と筋とが發達してをる、口の内に一種特別な武器を持つ

てをる。彼が若し象のやうに大な動物であつたら、恐らく向ふ所敵の無い動物となるだらう。面白い事に、二疋の鼴鼠が地面の下で出會すと、然も仲の好い同志のやうに、一緒に地面を掘り出す、そして場所を廣くしといて、それから喧嘩を始める。』と、フォン・コオレンは聲を低めて『さ、ここに百ルウブルある。然れどもこの金には條件があるよ。ラアエウスキイの爲に貸すのなら御免だ。』

『ラアエウスキイの爲なら如何だと言ふんだ。』と、サモイレンコオは吹出した。

『それが君に何の關係が有る。』

『ラアエウスキイに遣るんなら御免だ。君が彼に金を貸してゐる事は、僕知つてをる。君は人殺しのケリムにさへ金を貸さうといふ人だ。然れども……許し給へ……僕はラアエウスキイを助けるのは厭だ。』

『實はラアエウスキイの爲なんだ。』と言ひながら、サモイレンコオは立上つて、『然う、ラアエウスキイの爲なんだ。だが、鬼であらうと惡魔であらうと、僕が僕の金を始末するのに干渉する權利は無いんだ。如何だ、貸して呉れるのか。』

助祭は埒らなくなつて吹出した。

『まア、然う激してはいかん。』と、動物學者は言ふ。『僕の意見に依ると、ラアエウスキイに親切を盡すの恐は、鉱斯を養ふの恐に等しい。』

『僕の意見に依ると、隣人は助けて遣らなければならん。』と、サモイレンコオは唾を返した。

『若し果して然うなら、君は何故其處の塀の後に腹が減つて寢てゐる土耳古人を助けて遣らないのだ。あれは職人だ、君のラアエウスキイよりも、遙に必要な、遙に有益な人間だ。彼に百ルウブル遣り給へ。然らずむばエクスペヂショ

ンの費用として僕に百ルウブル呉れ給へ。』
『君は僕に貸して呉れるのか、呉れないのか。』
『ては率直に言ひ給へ。彼は何の爲に金が入るんだ。』
『ああ言ふとも、それは秘密でも何でもない。彼は土曜日にビイタアスバアグへ立たなければならんのだ。』
『然う。』と、フオン・コオレンは緩り言ふ。『あはア……分つた。女も一緒に行くんだね。』
『いや、女は暫く後へ殘る筈だ。ビイタアスバアグで、自分の用の片附き次第、男から金を送る事になつてをる、それから女が歸る筈になつてをる。』
『巧い。』と、笑を抑へて動物學者は言ふ。『巧い。どうも實に巧い。』
彼は急いでサモイレンコオの側へ歩み寄つて、その顏を覗くやうにして、そ

の眼の内を凝と見ると——
『正直に言ひ給へ。彼はもう女を愛してないんだらう。然うだね。然うだね。』
『然うだ。』と、サモイレンコオは口の内で言ふ。
『ペッ。』と、フオン・コオレンは嘔吐つきさうな顏をして言ふ。『アレクサンデル君、君と彼とは共謀になつてゐるのだ、然らずむば、君は阿呆だ。君は彼奴の道具にされてゐて、それが自分に分らないのか。彼は女を逃げたいのだ、女を此所に置いてきぼりにして行きたいのだ、僕にはそれが日光の如く明だ。結局女が君の手に殘つて、君が女を自分の金でビイタアスバアグへ送らなければならん事になるに定つてをる。君の秀拔なる友人の美德は、斯かる明白な事實が見えなくなるまで、君の眼を盲目にして了ふ事が出來たのか。』
『君は唯當推量をしてゐる計りだ。』と答へながら、サモイレンコオは最一度腰

を卸した。
『當推量だつて。では何故一人で行くんだ。何故女と一緒に行かんのだ。實に彼奴は狡い奴だ。』
友人に對する不意の疑惑に襲はれて、サモイレンコオは一言も答へる事が出來なかつた。彼は調子を低めた、併しながら、その晩ラアエウスキイが來る筈になつてる事を思ひ出して、斯う言つた。
『いんや、そりや駄目だ。彼は恐ろしく苦しんでをる。』
『それが如何した。盜賊だつて苦しめば、灯取蟲だつて苦しむさ。』
『成程、君の言ふ所は正しからう。』と、サモイレンコオは口籠りつゝ言ふ。『だが、許し給へ……彼は青年だ、外國へ來てをる學生だ……吾々も等しく學生ぢやないか。彼を助ける者は誰も外に有りやしない。』

『單に君と彼とが同級生であつたといふだけの理由で、君は彼が不潔な事をするのまで助けて遣るといふのか。何といふノンセンスな事だ。』
『待ち給へ……一つ徐に考へようぢやないか……どうだい、斯うしたら好いだらう。』と、サモイレンコオは指を弄りながら言ふ。『僕が彼に金を遣るんだ、然れども先づそれに先だつて、今から一週間以内に必とナデエダを迎へるといふ紳士としての嚴肅な約束を求めるのだ。』
『ああ、その位の誓なら喜んでするだらうよ。それ處が、涙まで流して、必とその約束を守らうと思ふだらうよ。然れども結局彼の語に幾何の價がある。彼は必とそれを守りはせんぜ。若し二年の後に、新しい女と腕を搦んでネウスキイを歩いてる彼に君が會ふとすれば、彼は文明に壓服されたのだとか何とか言つて、必と自分の行爲を辯解するだらう。好いから打捨つて置き給へ。不潔物

の側へ寄り給ふな、不潔物の中へ兩手を突込むやうな事を爲給ふな。』

サモイレンコオは暫く考へてゐたが、やがて決然として言ふ。

『何でも好い、僕は彼に金を遣る……僕は猜疑て人を罪する事は出來ない。』

『好からう。行つて彼を抱いて遣るさ。』

『ては百ルウブル與れ給へ。』と、サモイレンコオは怯々して言ふ。

『厭だ。』

暫く語が絶える。

疲れ果てたサモイレンコオは、申譯が無いといつた樣な、嘆願する樣な顏附をした。肩章や勳章で飾られたこの大柄な男が、こんな情ない、子供らしい顏附をした所を見るのは餘程不思議であつた……

『この土地の僧正は管區を歩くのに馬に乘つて歩く、決して馬車に乘つて歩かない。』と、ペンを置いて助祭が言ふ。『あの人が小な駒に乘つた姿は、甚しく人を感動させる。あの人の質樸と謙遜とは聖書の敎通りて實に立派なものだ。』

『好人物かね。』と、會話の題目の變るのを喜んで、フオン・コオレンが訊ねる。

『てなくて、如何する。好人物でなかつたら僧正に任ぜられる筈がないさ。』

『僧正の中には全く天賦の好人物がをる。』と、フオン・コオレンは言ふ。『だが惜しい事に、彼等の多數は、自己を政事家だと思ふ弱點を有してをる。政治學と科學とは彼等の職でない。彼等はもつと高僧會議に盡さなければならん。』

『俗人が僧正を裁く事は出來ん。』

『何故出來んか、助祭君。僧正と雖も吾人に等しい一箇の人間ぢやないか。』

『そりや然うさ、だが又然うてないて。』と、助祭は又ペンを取上げながら答へる。『君が若しあの人に等しい人間だつたら、祝福は必ず君が身の上に宿つて、

君は僧正の地位を得たに相違ない。君が僧正でないのは、君があの人と違ふ明な證據だ。』

『廢し給へ、助祭君。』と、サモイレンコオは悲しげに言つたが、やがてフオン・コオレンの方を振向いて、『好し、では百ルウブル僕に貸すのは廢し給へ。その代りね。君は僕の處で冬まで賄をする事になつてをる。まだ先三月あるから、それを前金で拂つて呉れ給へ。』

『それも拂ふのは厭だ。』

サモイレンコオの眼はぎろりと光つた、そして眞赤になつた。器械的に乾燥した昆虫の乘つてる本を取上げると、それを凝と見た。やがて、それを元の所へ置くと、立上つて帽子を取つた。

フオン・コオレンは氣の毒になつて來た。『好いから勝手にあんな奴と交際ひ

給へ。』と、彼は怒つて紙屑を部屋の隅へ蹴飛しながら言ふ。『好いかい、君のは決して親切といふものでもなければ、愛情といふものでもないのだよ、君のは臆病なんだ、軟弱なんだ。君のやうな人間は、その弱き心がある爲に、折角好い頭で爲た好い事をも傷つて了ふのだ。僕が學生の時分に腸窒扶斯に罹つた事がある、處が僕の伯母は、親切心から僕に菌ばかり食はした、それが爲に僕は危く死ぬ所だつた。君は恰ど僕の伯母と同じ人だ。君の愛情にして若し幾何の價値があるものなら、心臓だの胃腑だのに在つてはいかん、此處さ、此處さ。』と言つて、フオン・コオレンは、額を輕く打つた。

それから、『さ、持つてき給へ。』と言つて百ルウブルの札を投り出した。

『何も君然う怒る事はないさ、ねえコルヤ。』と、サモイレンコオは百ルウブルの札を畳みながら、卑下するやうに言ふ。

『君の云ふ事は好うく分つてゐる。併し……僕の地位にもなつて見給へ。』
『君かい、君は一箇の老婆たるに過ぎない。それだけぢやないか。』
助祭は又吹出した。
『なあ、アレクサンデル君、僕の最後の願はこれだ。』と、フオン・コオレンは熱心に言ふ。『その金をあの悪漢に渡す時に、條件を出してそれに服從させ給へ、女を一緒に連れて行くか、女を先づ初に返すか……てなければ、決して金を渡してはいかんよ。彼奴を取扱ふのに何も段取る必要はない。好いから、奴に然う言ふさ、若し愈君が然う言はなければ、誓にかけて僕は奴の役所へ行く、そして奴を梯子段の下へ叩き落す。そして君とは……もう君とは交際を絶つ。』
『一緒に行かうと、一人先へ遣らうと、それは何方でも構ふまい。必と何方かにさせるから。』と、サモイレンコオは言ふ。『兎に角非常に喜ぶだらう。ぢや、

然やうなら。』
彼は徐に別れを告げて、出て行つた。が、扉を閉める前に、最一遍振返つて、歪め面をして、フオン・コオレンの顔を眺めた——
『君を害したのは獨逸人だ。然うだ。獨逸人だ。』

（十一）

その翌日、即ち木曜日に、マリアは娘コスチャの誕生祝をした。客は、畫はバイを食べに、夜はチョコレエトを飲みに招待された。

ラアエウスキイとナデエダとが、打連立つて夜遣つて來た時に、動物學者は既に客間でチョコレエトを飲んでゐた。

『もう話をしたか。』と、彼はサモイレンコオに訊いた。

『いんや、未だ。』

『段取る事はないぜ。彼あいふ奴の傲慢といふものは實に度數が知れんからね。奴等二人は自分達の事をこの一家が何と思つてるか好く知つてるんだ、知つてゐながら遣つて來る奴等だ。』

『世間の奴の云ふ事を一々氣にしてゐたら、吾々はみんな始終内にばかり引込んでゐなけりやならんさ。』と、サモイレンコオは言ふ。

『君は奴等のやうな關係に對する社會の態度を偏見だといふのか。』

『確に……偏見だ、憎惡だ。』

『して見ると、アンナ・カレニナが汽車の下になつたといふ事實、或未知の理由に依つて君や僕がカチャの純潔を讃美するといふ事實、世の中に然ういふ愛は無いと知りながら、吾人は常に清淨な愛を欲して止まないといふ事實……これらは總て偏見だね。』

ラアエウスキイは客間へ這入ると、居合す人々に一々挨拶した。そしてフオン・コオレンの手を握つて、悲しさうに笑つた。それからサモイレンコオに話の出來る機會を待つてゐた。

『失敬、アレクサンデル君、僕一寸君に話がある。』
サモイレンコオは、立上つて、彼と一緒にニコヂンの居間へ這入つた。
『明日は金曜だ。』と、ラアエウスキイは爪を噛みながら言ふ。『約束の物は出來たか。』
『まだ二百ルウブルしか出來ん。後は今日か明日必と出來る。安心して居給へ。』
『有難い……』ラアエウスキイは吐息をほッとついた、その手は嬉さに震へた。
『君は僕を救つた、アレクサンデル君。僕は神にかけて、自分の幸福にかけて、君の欲する在らゆる物にかけて誓ふ、ピイタアスバアグへ着き次第、必と金は送る、古い借金もその時一緒に片を附ける。』
『處で、ワンヤ……』と、サモイレンコオはラアエウスキイの上着の襟を捉へて、眞赤になつて言ふ。『君の私事に干渉するのを許し給へ……が……何故君はナデ

エダを一緒に連れて行けんのか。』
『可笑しな男だ。如何して連れて行けるものか。二人の内何方か一人殘らなかうもんなら、債權者が一揆を起すぜ。僕は方々の店に少くとも七百ルウブルから借金がある。僕は先づ彼等に金を送る、悪い噂を止めさせる。それから威張つて女に此所を立ち退かせようといふのさ。』
『なアる……ては何故女を先へ返さないんだ。』
『ど、ど、如何して、如何してそんな事が出來るものか。』と、ラアエウスキイは吃驚した顔をして言ふ。『あれは女だ。一人で先へ行つて何が出來ると思ふ。それこそ無駄な費だ。』
『成程それも一理有る……』と、サモイレンコオは考へる。が、フオン・コオレンとの會話を思ひ出すと、急に眼を落して、悲しさうに、『いんや、僕は君に一致

する事は出來ん。女と一緒に行くか、然らずんば先づ最初に女を送り給へ、でなければ……でなければ金を渡す事は出來ん、これが僕の最後の語だ……』

彼は後退をして行つて、扉を押し開けると、甚しく激して出て行つた。

『金曜日……金曜日……』と、考へながら、ラアエウスキイは客間へ戻る。『金曜日……』

如何したのか、彼は《金曜日》といふ語を、如何しても頭から取去る事が出來なかつた。彼は暫く外の事は何も考へずにゐた。

と、綺麗に髪の毛を梳いた、氣取つた小男の、ニコヂン・アレクサンドロキッチが、彼の前へひよッこり出て來て、酒を勧める。

マリアはカチャの通信簿を客に見せてゐる。『どうも學校の課程が難し過ぎるやうてございますね。』と、靜に彼女は言ふ。

『あら、阿母さん。』と、カチャが反對する。

ラアエウスキイは通信簿を見て、褒めた。課目の名と點數とが彼の眼の前で踊り出した、そして彼の心の内で《金曜日》といふ字と入り亂れた。ニコヂンの綺麗に梳いた髪の毛だの、カチャの眞赤な頰ぺただの、語だの、點數だの、在らゆるものが、疲勞を以て彼を壓迫して來たので、彼は殆ど泣き出しさうになつて來た。『迎も、迎も立たずにはゐられない。』と、彼は口の内で言つた。

やがて骨牌の卓が二つ並べられた、一同は『郵便局』をしようといふので、席に着いた。ラアエウスキイも亦席に着いた。

『金曜日……金曜日……』と、彼は又考へる、笑ひながら、そして、同時に衣兜から鉛筆を出しながら。『金曜日……』

彼は自分の境遇を考へようとした、併し、考へるのを恐くも思つた。ドクト

ルに嘘を見現されたのは、彼にとつて甚しい苦痛だつた。將來の事に就いては、彼はもう何も考へまいと思つた。汽車に乘つて、そして出發する——現在はそれだけで澤山だ。それから先は考へなくとも好い。併し、平原で見る遠い微な光のやうに、或思想が時々彼の心中に閃く。ピイタアスバアグの何處かの横町の或家で、遠い遠い將來に、ナデエダに別れる爲に、そして借金を拂ふ爲に、如何しても嘘を吐かなきやならないやうになるやうな氣がする。併し、彼は一度嘘を吐いて、そして、それから自分の全部を改革しようと思つてるのだ。それは宜しい、彼は小な嘘を拂つて大な誠を買はうとしてるのだ。

併しながら、今ドクトルが彼の乞を拒絶して、彼の行つた虚僞に對して辛く當つた事實を以て見ると、これは將來ばかりでなく、今日も、明日も、それから一月先も、恐らくは一生涯嘘を吐き通しにしてゐなけりやなるまいかと思は

れる。實際、兎にも角にも此所を去るにはナデエダに嘘を吐かなければならぬ、債權者にも嘘を吐かなければならぬ、役所にも嘘を吐かなければならぬ。それから愈ピイタアスバアグで金を拵へる段になると、ナデエダの事に就いて母に嘘を吐かなければならぬ、所が母は必と五百ルウブルより餘計には呉れまい、とすれば、直もう軍醫に嘘を吐いてゐる事になるんだ、直に金を送ると言つといて、それが送れなくなつたんだから。それからナデエダがピイタアスバアグへ來ると、如何にかして別れようと思つて、嘘の百萬遍を繰る。それから涙となり、後悔となり、殊に苦々しい前生涯の悔恨となつて、終に何の改革も出來ないんだ……嘘、そして嘘の外には何も無いんだ。嘘の山がラアエウスキイの想像世界に高くなつた。これを逃れるには、此處に留つてゐる事は出來ぬ。蹶起一番、萬難を排して出發しなけりやならん——縱し一文無しても。併し、そ

れは出來ないと彼は思つた。

『金曜日……金曜日……』と、彼は又思ふ。『金曜日……』

一同は紙に何か文句を書いて、それを丸めて、ニコヂンの古い山の高い帽子の中へ投り込んだ。やがてそれが山の樣になると、コスチャが郵便脚夫になつて卓の周圍を廻りながら、みんなにその紙を配つて歩く。

助祭とカチャとコスチャとは、この遊を喜んで、可笑しな手紙の文句に夢中になつた。

《あたし貴方に御話があつてよ。》ナデエダは自分に宛てゝ來た手紙を斯う讀んだ。彼女はマリアと眼を見交した、マリアは例の《巴旦杏微笑》をして、ナデエダに頷いて見せた。

『何だらう。』と、ナデエダは怪んだ。

マリアの内へ來るとて家を出る時、ナデエダはラアエウスキイの襟飾を結びながら、男の顏に憂の色のあるのを見た、その放心した眼附に眼をつけた、この頃彼の一躰に變つた事に氣が附いた。これらの兆は最後の離別を意味するのではあるまいかと思つた時、女の手は震へた。女の良心は女を責めた、男の頸に手を觸れてゐる間も、女は心の内で、幾度か宥免を願ふ祈禱を繰返した。

今はアフミアノフが卓の恰ど向側に座つてゐて、可愛らしい黑い眼で、凝と彼女を見詰めてをる。と、或大膽な望が女の心を擾す、そして、女に自分の考を恥ぢさせる——が、悲哀も憂愁もこの心を女から取る事は出來なかつた。彼女は醉漢のやうに、毒を嫌ひながら毒を捨てることが出來なかつた。

彼女の生活は、自分の眼から見ても不名譽なものであつた、ラアエウスキイを侮辱したものであつた——彼女は逃げなければならぬと思つた。涙を以て男

に離別を乞はうと思つた。若し許されなかつたら、窃と逃げて了はうと思つた。併し、自分の不貞な事だけは打明けまいと思つた。彼女は終まで男には純潔に思はれてゐたいと思つた。

《我愛す、我愛す、我愛す。》と、ナデエダは讀んだ。これはアフミアノフから來た手紙だ。

彼女は思つた、是非とも此處は去らう、そして、ラアエウスキイに金を送つて遣らう、誰からといふ事は知らさずに。それから尙時々贈物をしよう、さうして彼が老人になるか病氣になるかした時、初めて歸る事にしよう。彼女が彼の爲に盡した事——彼女が自己を犧牲にした事——は必と今に分る時が來るだらう。そこで初めて分つて、彼は彼女を許すだらう。

《御前樣の鼻は長いことね。》これは必と助祭か、コスチャから來たものだ。

ナデエダは離別に際して、自分がラアエウスキイを抱く姿のいぢらしさを想像した、彼女は彼の手に接吻して、一生、一生忘れないといふ事を誓ふだらう。そして、それから自ら罪した追放の人となつて、見も知らぬ人々の間に月日を送る間も、自分には何處かに一人の友達がゐるといふ事を思はない日はないだらう。その友達といふのは、愛すべき、純潔な、氣高い、高尙な人で、いつまでも彼女に就いて純潔な思想を抱いてゐる人だ。

《君若し、今宵小生に誓ひ給はずば、小生は總てをラアエウスキイ君に物語りて、公衆の前に恥辱を與ふべし。》と、これはキリリンから來た文句だ。

ナデエダは一片の紙を取つて、《そは卑劣なり。》と返事を書いた。

キリリンは卓の側に斜に向いて座つて、足を組んでゐた。彼は掌で唾い顏を擦つてゐた。彼は稍もすれば出さうにする欠伸を漸と呑込みながら、自分に宛

て、來た手紙を懶げに讀んでゐた、そして時々御世辭笑をしてゐた。

ナデエダの返事を讀むと、俄に聲を高くして——

『淑女及紳士諸君、私は諸君に御注意を煩はしたい事がある。二三日前に、或戀愛事件が、神の讃らせ給ふこの小都會に起りました。或年若な婦人が或士官と逢引をする約束をしたのです……』

ナデエダは慄然とした。急いで《諾、諾。》と書いて、それを卓を越してキリリンの方へ投つた。

『その士官は約束した村へ行きました、處が女の亭主に其處で目つかつて、酷く擲られました……』

『まア好い氣味。』と、マリア・コスタンチノウナが言ふ。

『今日身を隱して、そして明日立たう。』と、ナデエタは考へる、惡寒に次いで來

た上氣に頰を熱らせながら。

（十二）

ラアエウスキイは手紙を二つ受取つた。その一つを開けたら、斯う書いてあつた。《立つてはいけないよ、好い子だから。》

『誰が書いたのかしら。』と彼は考へる。『勿論サモイレンコオてはない……が、助祭でもない。奴は俺の立たうとしてる事を知る筈がない。フォン・コオレンかな。』

動物學者は机に凭り掛つて、ピラミッドの繪をかいてゐた。ラアエウスキイには、彼の眼が笑つてゐるやうに見える。

『サモイレンコオの奴が必と洩したに違ひない。』と、ラアエウスキイは然う思ふ。最一つの手紙も、同じやうな金釘流で、いやに尻尾を長く、曲り拗つて書いて

あつた。曰く《それに誰かゞ土曜日に行くのを厭がるよ。》

『俺を嘲弄してるな。』と、ラアエウスキイは思ふ。『金曜日、金曜日……』

偶と何かゞ咽喉に閊へた。彼は襟を爪探つて、咳をしようとした。が、咳の代りに笑が込上げて來た。

『ハ、ハ、ハ。』と彼は笑ひ出す。『ハ、ハ、ハ。何を笑つてるんだ。』と彼は考へる。

『ハ、ハ、ハ。』

彼は手で口を塞いで、自ら抑へようとした。けれども笑は胸と咽喉とを堰いて來て、迚も止める事が出來ない。

『何といふ馬鹿な事だ。』彼は又吹出しながら、斯う思ふ。『氣でも狂つたのかしら、でなけりや如何したんだ。』

彼の笑は段々聲が高くなつた、そして小犬の吠えるやうに響いた。

彼は立たうとした、が、立つ力も無かつた。彼の右の手は、心にもなく、卓の上を怪しげに動いた。そして慄へながら紙を掴んだ。

彼は人々の驚異の眼と、サモイレンコオの、眞面目な、吃驚した顏と、動物學者の冷い嘲弄に充ちた凝視とに氣が附いた。そして自分のヒステリイに罹つた事が分つた。

『何といふ、恥辱な事た。』と彼は思ふ、暖い涙の頰に流れるのを覺えながら……

『ああ、ああ、何といふ恥辱な事た。こんな事は今まで決して無かつたのに……』

彼は、誰かに腕を支へられ、誰かに後から頭を押へられて、何處か外の場所へ連れて來られた。やがてコップが眼の前に閃いた、カチリと齒に當つた、さうして水が胸の上へ瀉れた。彼は今、二つの寢臺が眞中に列べて置いてある小な部屋にをる。寢臺は、綺麗な、雪のやうに白い毛布で覆うてある。彼は寢臺

の一つに身を投げかけて、獻欷を始めた。

『何でもない……何でもないさ……』と、サモイレンコオは言ふ。『こんな事はよく在るよ……よく在る奴さ……』

恐怖に身内も寒く、悉く手足を慄かせて、何か恐しい事の起るのを豫知しながら、ナデエダは寢臺の側に立つてをる。

『如何なすつたの。』と、女は訊く。『御願てすから、言つて頂戴……』

『キリリンが何か書いて送つたのぢやないかしら。』と、女は思ふ。

『如何もしやしない……』と、ラアエウスキイは泣笑ひをしながら言ふ。『彼方へ行つて、呉れ……好い子だ。』

男の顏は、憎惡の色をも、嫌厭の色をも表さなかつた、それが爲に彼は何も知らないで了つた。ナデエダは稍心が落着いて、客間へ戻つた。

『落着いて入らつしやいましよ。』と、マリア・コンスタンチノウナは、彼女の側へ座つて、その手を取りながら言ふ。『直に濟んで了ひますわ。男といふ者は私共罪人と同じやうに弱いんですのね……貴方方は御二人共、恰ど今難しい所をお切抜け遊ばしたんですわ……そりや直分りましてよ。さア、貴方、私御返事をお待ちしてをりますのよ……その御話をしようぢやございませんか。』

『いんえ、もう御話は御免遊ばせ。』と、ナデエダはラアエウスキイの獻欵に耳を傾げながら言ふ。『私もう疲れましたわ……歸らして頂きませう。』

『何を被仰るの。』と、マリアは吃驚して言ふ。『御飯も差上げない内に、如何してお返しが出來ませう。何か召上つて、それから……御隨意に……』

『でも私大層疲れてるんでございますもの……』と、ナデエダは囁いた。彼女は兩手で椅子の腕を確と掴んで、倒れさうになる身を支へた。

發作が終ると、ラアエウスキイは起上つた。『何といふ恥辱な事だ……娘のやうに泣くなんて。』と、彼は然う思ふ。『見てゐて餘程可笑しかつたに相違ない。裏口から歸らう……いや、それは却つて好くない……常談の積りにして了はう。』

彼は鏡に映る我が姿を見た、暫く座つてゐた、それから客間へ這入つた。

『どうも失敬。』と、笑ひながら彼は言ふ。彼は痛く自己を恥ぢてゐるのだ。『時々斯ういふ事があるんです。』と、座りながら語を續けて、『こんな風に座つてると、突然横ッ腹が刺されるやうに痛くなつて來るんです……それが迚も堪へられないんです……僕の神經は迚もそれに堪へられないのです、そして……僕は自分で自分を愚弄します。ああ、吾人の神經過敏時代、吾人は迚もこれに敵し難い……』

食事の時、彼は酒を飲んで、饒舌をした、そして、まだ痛が去らぬといふ樣

子を見せる爲に、時々脇腹を叩いた。併しながら、ナデエダの外に、誰もそれを信ずるものはなかつた。それは彼もよく知つてゐた。

十時頃になると、主人も客も家を出て、廣小路を散歩した。

ナデエダは、キリリンに側へ來られて、話掛けられては大變だと思つたから、マリアとその子供達に引附いて歩いた。彼女は恐怖と疲勞で氣が遠くなつて、屢歩み惱んだ。彼女は自分の家へ歸らなかつた、家の方へ行けば、キリリンか、アフミアノフか、或は兩方共、必と附いて來ると思つたからだ。

キリリンは、ニコヂンと一緒に、みんなの後から歩いて來た、そして低い聲で、「われ戯をゆ—るさじ。われ戯をゆ—るさじ……」と唄つた。

廣小路から皆はカフエエの方へ曲つた。そして、燐光を發する海の景色を賞しながら海岸を歩いた、この現象に就いてフォン・コオレンの説明するのを聽

きながら。

おれはるアエウスキイ
女達をつくるのだ。上達をつくつて強くするのだ
女はなぜ世の煩悩か

（十三）

『もう骨牌の時間です……嘸皆が待つてをりませう。』と、ラアエウスキイは言ふ。『では皆様、これで御免蒙ります……』

『待つて頂戴、私御一緒に參りますわ。』ナデエダは斯う言つて、男の腕を取つた。

皆も別を告げた。

キリリンは、一人一人に別を告げて、自分も同じ方へ行くのだと言つた、そして二人と一緒になつた。

『如何したつて、逃げる事は出來やしない……』と、ナデエダは思つた。

彼女の記憶に貯へられてをる總ての淺ましい過去が、悉く今その腦髓から歩いて出て來て、暗闇の中を彼女の道連になつだやうな氣がする。彼女は自分をインキの井戸へ落込んで、其邊中眞黑にしながら、蹌踉と徊廻つてゐる蠅のやうに思つた。

キリリンの苦しむ所は決して無い、責められるのは自分だけだ、と彼女は思つた。もう男が以前のやうに口を利くべき時ではなかつた。が、時の過ぎたのは彼女が惡いからだ。彼女は、この丈の高い、立派な男を見て、微笑まずにはゐられなかつた、また厭にならずにはゐられなかつた、憎まずにはゐられなかつた。

『僕はこゝで別れるよ。』と、ラアエウスキイは立留つて言ふ。『御前はキリリン君が送つて下さるだらう。』

と、彼はキリリンに頭を下げると、直と廣小路を突切つて、シエシコウスキ

イの家の方へ歩いて行つた。二人は彼が門の扉を後へバタリと閉める音を聞いた。

『貴方は先程(諾)といふ御返事をなさいましたね…』と、キリリンは口を開く。

『さ、どうぞ御自由に。』

ナデエダの心臓は鼓動を早めた。彼女は何も言はなかつた。

『貴方は私に對する態度の變化を、今まで私はコケットリイだと思つてをりました。』キリリンは語を續ける。『所が今になつて見ますと、外に……或深い理由があつたんですね。貴方は猫が鼠に戯れるやうに、私に戯れようとなすつたんです……ですから、どうぞ御自由に……』

『私疲れてをりますのよ……』と、ナデエダは言つた。彼女は靜に泣き出した、そして涙を隠さうとして脇を向いた。

『そりや私も疲れてをります、どうもそりや爲方がありません。』

キリリンは稍暫く默つてゐた。が、軈て、一語一語の間に間を置いて、明晰と斯う言つた。

『奥様、私は繰返して申上げますよ、若し貴方が依然として私に對する態度をお變へなさらなければ、今夜即刻、貴方は私の情婦だと、私は世間を觸れて歩きますよ。私は貴方に對してラアエウスキイ君と恰ど同じ權利を持つてゐるのです。』

『今夜は何卒もうお歸り下さいまし。』と、ナデエダは言つた。彼女は辛うじて自分の聲を聞くことが出來た、それ程彼女の聲は悲く弱く響いた。

『いんや、私は貴方に敎へて上げなければならないです……どうか無作法な調子は許して頂きたい……佛蘭西人の語によると、調子は音樂を爲すと言ひます。

然うです、悲しいかな、私は貴方に敎へて上げなければならないんです。今日と明日、と二日間私の言ふ通りにお成りなさい。それから後は、鳥のやうに自由です、何處へでも行きたい處へ入らつしやいまし、誰とでも好きな方と一緒にお暮しなさいまし。』

二人はナデエダの家の門まで來た、そして立留つた。

『何卒お歸り下さいまし。』と、彼女は囁いた。手足が悉く戰く、暗闇の内には白いリンネルの上着の外何も見えない……『貴方の被仰る事にお間違はございません、私が惡いのでございます……罪は私にあるのでございます……然れども何卒お歸り下さいまし……御願でございますから……』彼女は彼の冷たい手に觸つた、そして、ぞッとして身慄した。『ほんとに御願でございますから……』

『ああ。』と、キリリンは言ふ。『貴方をこの儘返すのは決して私の本意ぢやありません、それに、奥樣、私は元來女といふ者を信じません……』

『私今夜は疲れてをりますの……』

ナデエダは海の單調な怒號に耳を傾けた。星の輝く空を仰いだ。彼女は萬物の絶滅に對して烈しい欲望を感じた、この生の壓迫と共に、海も、星も、人間も、熱病も、等しく滅びよと冀つた。

『では私の家でなくね……』と、彼女は冷に言ふ。『何處か餘所へ連れて行つて下さいまし。』

『ぢやあムリドフの家へ行きませう……彼處が一番好い。』

『それは何處でございますの。』

『城跡の直ぐ側です。』

急ぎ足で彼女は歩き出した、そして山の手へ行く横町へ曲つた。眞闇だ。敗石道の其處此處に、窓から洩れる青白い燈の箭が差してゐる。彼女は又先刻想像した蠅になつたやうな氣がした、彼女は一度インキの中へ落込んで、又明るみへ佝ひ出したのだ。キリリンは女の少し後から歩いて來る。何處かで一度躓いて、危く轉びさうにすると、彼は笑ひ出した。

『醉つてるんだよ。』と、ナデエダは然う思ふ。『何方にしても同じ事だ……何方にしても同じ事だ……もう如何でも好い。』

一方、アフミアノフは一同に別を告げて、直とナデエダの後を追つた、夜の空氣の中で、彼女と唯二人、船遊をしようと思つてゐる。女の家まで來ると、彼は墻を透して中を覗いた。窓が開けッ廣げてある、が、燈の氣は少しも無い。

『ナデエダ・フエドロウナさん。』と、彼は呼んで見た。

直と一分時は過ぎた。

彼は又呼んで見た。

『誰方。』これはオルガの聲だつた。

『ナデエダ・フエドロウナさんは御在宅て入らつしやるかい。』

『いんえ、まだお歸りになりません。』

『變だぞ……餘程變だぞ……』と、アフミアノフは不安になつて來る。『確に家へ歸つた筈だのに……』

彼は廣小路を歩き廻つた。それから通りを横に突切つて、シエシコウスキイの家の窓を覗き込んだ。ラアエウスキイが、上着を脱いで、卓の側に座つて、一心に手の内の骨牌を見詰めてをる。

『變だぞ……變だぞ。』と、アフミアノフは誼く。『家にゐないとすると、何處にゐるんだらう。』

彼は又ナデエダの家まで行つて、そして、暗い窓を眺めた。

『嘘、嘘……』と、彼は思ふ、女が今晩彼と一緒に、船を漕ぎに出る約束をしたのを思ひ出して。

キリリンの家も眞暗だつた、そして從卒が門の前のベンチに腰を掛けて、主人の歸りを待つてゐた。直に總てがアフミアノフに分つた。

彼はもう家へ歸らうと決心した、が、最一遍ナデエダの家の前へ出て、ベンチに腰を卸して、帽子を脱つた。彼の頭は嫉妬で燃えるやうだつた、彼は甚しく侮辱されたやうな氣がした。

町の寺の大時計は廿四時間の内に唯二回時を打つ——正午と夜半と。その時

計が夜の十二時を打つてから間もなく、彼は急ぎ足の近づく音を聞いた。

『ちや、明日の晩、又ムリドフの家でな。』といふ聲をアフミアノフは聞いて、そのキリリンである事に氣が附いた。『八時にな。Au revoir。』

ナデエダは墻の側に姿を現したが、ベンチに腰を掛けてゐるアフミアノフには氣が附かずに、その前を通過ぎて、暗闇の方へ行つて了つた、やがて門を開けて、内へ這入つた。

女は蠟燭を附けて、直ぐと着物を脱いだ、が、横にはならなかつた。椅子の前に跪いて、椅子の廻りに兩手を掛けて、頭を座部の上に載せた……

それから二時間經つて、ラアエウスキイは歸つて來た。

（十四）

困り拔いた揚句、外に手段が無いので、ラアエウスキイは終にその已むを得ざる手段に膝を屈した、即ち、嘘の連發を必要とした。明くる日の二時に、彼はサモイレンコオの處へ金を貰ひに行つた。彼は土曜日に間違なく出發しようと決心してゐた。

昨夜のヒステリイは彼の決心に封をした――恥辱の念は最早一刻も彼をこの土地にをらざらしめようとしたのである。

ラアエウスキイは考へた、若しサモイレンコオが飽くまで例の條件を主張するやうだつたら、一先づそれに從つて、金を貰つて、そして明日、愈出發といふ間際になつて、ナデエダが一緒に行くのは厭だと言ひ出したと言はう。一

方ナデエダに向つては、これも皆御前の爲だと說かう。が、若しサモイレンコオが、何處までもフオン・コオレンの勢力に壓されて、如何しても金を呉れないか、或は新條件を持出すなら、もう拂はない、その日に小蒸汽か帆船で、ニウ・アトスかノオロシスクへ立つて了はう、其所から母の所へ哀願の電報を打たう、そして、その返事を待たう。

サモイレンコオの家へ這入ると、フオン・コオレンが客間にゐる。動物學者は恰ど今食事をしに來た所で、いつもの通り寫眞帖を廣げて、高帽子を冠つた男とボンネットを冠つた女を檢査してをる。

『惡い所へ來た。』と、ラアエウスキイは思ふ。『又邪魔をするだらう……』それから、聲を出して、『今日は。』

『今日は。』と、フオン・コオレンは顏を上げずに答へる。